

# 上園遺跡 11

— 第17次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第205集

2023

大野城市



かみの その  
上 園 遺 跡 11

— 第17次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第205集



2023

大 野 城 市



## 序

大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

上園遺跡は市域のほぼ中央に位置し、国指定史跡である牛頸須恵器窯跡の北側の一角にあたります。これまで 16 回にわたる発掘調査が行われ、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が確認されました。

今回報告する調査地では、主に古墳時代の住居跡が見つかりました。住居からは須恵器が大量に出土し、焼き歪んだ失敗品も含まれていることから、生産された須恵器の選別等が行われた可能性が考えられます。牛頸窯跡群開窯期における須恵器工人たちの活動を明らかにするうえで、重要な成果となりました。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導を賜りました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和 5 年 3 月 31 日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

## 例 言

1. 本書は、大野城市上大利4丁目118番1に所在する上園遺跡第17次発掘調査の成果についての報告書である。
2. 調査は個人の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は山元瞭平が担当した。
4. 遺構実測は山元、齋藤明日香、澤田康夫が行った。
5. 遺構写真は山元が撮影した。
6. 遺物写真は(株)写測エンジニアリングに委託し、牛嶋 茂が撮影した。
7. 遺物実測は山元、小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江が行った。
8. 遺物拓本は小畑、篠田が行った。
9. 遺構図製図・遺物図製図は小嶋が行った。
10. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
11. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
12. 本書の第2図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
13. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については奈良文化財研究所による呼称を用いる。
14. 出土遺物・実測図・写真は、大野城市が保管・管理している。
15. 本書の執筆および編集は山元が行った。
16. 遺物の整理に関しては、京都府立大学の菱田哲郎氏にご指導を賜った。

# 本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査経過	1
3. 調査体制	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	6
IV. 総括	
1. 遺跡の位置付け	31
2. 平行文当て具痕を有する須恵器杯類について	33
3. 須恵器椀について	35
V. 附編	
1. 野添12号窯跡出土資料の紹介	36

# 挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/3,000)	3
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第3図 遺構配置図 (1/150)	6
第4図 SC01実測図 (1/60)	7
第5図 SC01出土遺物実測図① (1/3)	8
第6図 SC01出土遺物実測図② (25～28は1/2、その他は1/3)	9
第7図 SC02実測図 (1/60)	10
第8図 SC02出土遺物実測図 (38のみ1/2、その他は1/3)	11
第9図 SC03実測図 (1/60)	12
第10図 SC03出土遺物実測図 (44・45は1/2、その他は1/3)	12
第11図 SC04実測図 (1/60)	13
第12図 SC04出土遺物実測図 (1/3)	14
第13図 SC05実測図 (1/60)	16
第14図 SC05出土遺物実測図① (1/3)	17
第15図 SC05出土遺物実測図② (76は1/4、77は1/6、その他は1/3)	18

第16図	SC06実測図 (1/60) .....	19
第17図	SC06出土遺物実測図① (1/3) .....	20
第18図	SC06出土遺物実測図② (101・102は1/2、その他は1/3) .....	21
第19図	SC07実測図 (1/60) .....	22
第20図	SC07出土遺物実測図 (1/3) .....	22
第21図	SK01・03・04・07実測図 (1/30) .....	23
第22図	SK01・03・07・SP27出土遺物実測図 (1/3) .....	23
第23図	SK04出土遺物実測図 (1/3) .....	25
第24図	SC04～06一段下げ・表土剥ぎ出土遺物実測図 (155・157は1/2、その他は1/3) .....	26
第25図	SK04出土供膳具法量分布図 .....	31
第26図	竪穴建物出土土器比率図 .....	32
第27図	牛頭窟跡群における須恵器碗の変遷 (1/6) .....	35
第28図	野添12号窟跡出土遺物実測図 (1/3) .....	36

## 表 目 次

第1表	遺物観察表① .....	27
第2表	遺物観察表② .....	28
第3表	遺物観察表③ .....	29
第4表	遺物観察表④ .....	30
第5表	平行文当て具痕を有する須恵器杯類一覧 .....	34

## 図 版 目 次

図版1	(1) 調査区全景 (北東から) (2) 調査区俯瞰 (上が北)
図版2	(1) SC01全景 (東から) (2) SC01南北土層 (西から) (3) SC01貼床南北土層 (西から) (4) SC01カマド土層 (西から) (5) SC01カマド完掘状況 (南東から)
図版3	(1) SC02全景 (東から) (2) SC02東西土層 (南東から) (3) SC02カマド土層① (南西から) (4) SC02カマド土層② (南東から)



(5) SC02カマド完掘状況(東から)

図版4 (1) SC02貼床除去状況(東から)

(2) SC03全景(東から)

(3) SC03東西土層(南から)

(4) SC04全景(南東から)

(5) SC04南北土層(西から)

(6) SC04カマド土層(東から)

(7) SC05全景(南東から)

(8) SC05土層(南東から)

図版5 (1) SC06全景(南西から)

(2) SC06東西土層(南西から)

(3) SC06カマド土層①(南東から)

(4) SC06カマド土層②(南西から)

(5) SC06カマド遺物出土状況①(東から)

図版6 (1) SC06カマド遺物出土状況②(東から)

(2) SC06貼床除去状況(南西から)

(3) SC07全景(東から)

(4) SK01全景(北西から)

(5) SK04遺物出土状況①(南西から)

(6) SK04遺物出土状況②(南西から)

(7) SK04調査状況(南東から)

(8) 調査前全景(北西から)

図版7 出土遺物①

図版8 出土遺物②

図版9 出土遺物③

図版10 出土遺物④



# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

上園遺跡は、福岡県大野城市上大利3・4丁目を中心に広がる古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。1985年以降、16回にわたる発掘調査が実施されている。

本報告の調査地は上大利4丁目118番1で、周知の埋蔵文化財包蔵地「上園遺跡」の範囲内に当たる。埋蔵文化財の照会を受け、令和3(2021)年3月19日に確認調査を実施したところ、現地表面から約50cmの深さで遺構を確認した。

事業者は当該地に6棟の戸建住宅を建設する予定であり、敷地中央に道路を設置する計画であった。宅地部分は保護層が確保できるものの、道路部分は恒久的構築物であることから、発掘調査が必要と判断された。事業者からの計画予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和3年12月28日付で発掘調査の指示が出された。また、令和3年12月14日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。

これを受け、令和4(2022)年1月21日から同年3月30日にかけて発掘調査を実施した。調査対象面積は160㎡である。整理作業は、令和4年度に実施した。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は、事業者が全額負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた吉嗣波津子氏には記して感謝の意を申し上げたい。

## 2. 調査経過

発掘調査は、令和4年1月21日から開始した。はじめに重機による表土剥ぎを行い、2月1日から作業員による遺構の検出・掘削を開始した。調査区南側は、住居跡の重複が著しく、先後関係の把握に時間を要した。3月上旬には概ね遺構の掘削が完了し、3月16日にドローンによる空中写真撮影を実施した。その後、住居貼床の断ち割り等の追加調査を行い、図面・写真の記録作成を行った。3月28日から重機による埋め戻しを開始し、3月30日に完了した。同日に機材等もすべて撤収し、調査を完了とした。

## 3. 調査体制

令和3年度から令和4年度における発掘調査および整理体制は以下のとおりである。

### 令和3年度(発掘調査)

教育長	吉富 修(～6月)	伊藤 啓二(6月～)
教育部長	日野 和弘	
ふるさと文化財課長	石木 秀啓	
啓発整備担当係長	林 潤也	
主査	徳本 洋一	
主任主事	秋穂 敏明	

主事	鮫島 由佳						
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子	深町 美佳					
会計年度任用職員（庶務）	三好 りさ	光原 乃里子（～9月）	荒牧 美佐子（10月）				
	野上 知剛（11月～）						
発掘調査担当係長	上田 龍児						
主任技師	山元 瞭平						
技師	齋藤 明日香						
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫	石川 健（12月～）					
会計年度任用職員（発掘作業）	船越 桃子	深野 人美	大藪 英美	仲前 富美子			
	井口 るみ子	佐々田 薫	瀧口 松夫	大津 幸男			
	永田 眞知子	安倍 五郎	松田 紀雄	横野 茂樹			
	風 一文						
会計年度任用職員（事務補助）	山上 敬子	井之口 彩子					

#### 令和4年度（整理作業）

市長	井本 宗司						
地域創造部長	増山 竜彦						
大野城市心のふるさと館							
館長	赤司 善彦						
文化財担当 課長	石木 秀啓						
係長	林 潤也	上田 龍児					
主査	徳本 洋一						
主任主事	秋穂 敏明						
主任技師	山元 瞭平						
技師	齋藤 明日香						
会計年度任用職員	澤田 康夫	石川 健	山村 智子	深町 美佳			
	照屋 真澄（8月～）	小川 久典（～6月）	清水 康彰				
	大塚 健三（7月～）						
会計年度任用職員（整理作業）	白井 典子	仲村 美幸	小嶋 のり子	松本 友里江			
	津田 りえ	水室 優	古賀 栄子	篠田 千恵子			
	小畑 貴子						
会計年度任用職員（事務補助）	山上 敬子	井之口 彩子					



第1図 調査地位置図 (1/3,000)

## Ⅱ. 位置と環境

### 1. 地理的環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域の南側には、牛頸山とそれから派生する低丘陵が広がる。牛頸山は、背振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩に属し、表層は風化が激しい真砂土となっている。牛頸山北麓から北側低丘陵にかけては、御笠川の支流である牛頸川と、牛頸川の支流である平野川の開析作用によって無数の谷がつかられ、複雑な地形を形成している。上園遺跡は、市域のほぼ中央に位置し、南部の牛頸山から北側に派生する丘陵に挟まれた平地部に立地する。

### 2. 歴史的環境

上園遺跡の所在する大野城市南部の牛頸山北麓周辺では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が確認されている。ここでは、古墳時代以降の周辺遺跡を概観する。

大野城市南部では、6世紀以降に遺跡数が増加する。6世紀中頃には、九州最大の須恵器窯跡である牛頸窯跡群の操業が開始される。6世紀末から7世紀前半になると、窯の基数が大幅に増加し、牛頸窯跡群特有の「多孔式煙道」が登場する。また、小田浦窯跡群や月ノ浦窯跡は瓦陶兼業窯で、生産された瓦は那津官家と目される福岡市那珂遺跡群へ供給されている。集落は、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡、上園遺跡などがあげられる。上園遺跡では、後期の竪穴建物や掘立柱建物、ロクロピットが確認されたことから、須恵器工人集落と考えられる。古墳は、後田古墳群、小田浦古墳群、塚原古墳群などがあげられる。特殊な事例として、梅頭遺跡群において、廃窯後に「墓」として転用されたものが確認されており、窯内から鉄刀や鉄鏃、耳環などの副葬品が出土している。7世紀後半には窯の数が一時的に減少し、多孔式煙道窯から直立煙道窯へ変化するなど、生産の変革期に当たる。

奈良時代には牛頸窯跡群の操業が最盛期を迎える。ハセムシ窯跡群や井手窯跡群では、大小の窯を使い分けており、大型の窯では大甕、小型の窯では食器類の生産が行われた。特徴的な遺物として、調納を示すへら書きが施された大甕が出土している。当該期の集落は、本堂遺跡や塚原遺跡群、日ノ浦遺跡などがあげられる。本堂遺跡では、円面硯や転用硯、墨書土器などが出土しており、寺の存在が想定される。塚原遺跡群では、竪穴建物や土坑、廃棄土坑などが確認され、廃棄土坑には須恵器が一括して廃棄されていた。日ノ浦遺跡では、竪穴建物や土坑、廃棄土坑が確認された。

平安時代に入ると遺跡数は減少し、牛頸窯跡群も9世紀中頃に操業を停止する。当該期の遺跡は、本堂遺跡や上園遺跡、小水城周辺遺跡などが該当する。本堂遺跡では10世紀以降に遺構が増加し、掘立柱建物や溝などが確認されている。また、谷部からは墨書土器や呪符木簡など、祭祀遺物が多く出土している。上園遺跡では、掘立柱建物や井戸のほか、集落を区画する溝が確認されている。また、これらの遺跡が所在する上大利地区一帯からは焼き歪んだ瓦器や窯道具とみられる棒状土製品が数多く出土しており、瓦器生産に関わる遺跡としても注目される。



【春日市】

- |             |             |            |           |           |          |            |
|-------------|-------------|------------|-----------|-----------|----------|------------|
| 1. 須玖遺跡群    | 2. 春日公園内遺跡  | 3. 小倉水城跡   | 4. 大土居水城跡 | 5. 惣利宮跡群  | 6. 惣利遺跡  | 7. 惣利北遺跡   |
| 8. 惣利東遺跡    | 9. 惣利西遺跡    | 10. 天牟田京跡  | 11. 向谷北遺跡 | 12. 平田北遺跡 | 13. 円入遺跡 | 14. 春日平田遺跡 |
| 15. 春日平田西遺跡 | 16. 春日平田東遺跡 | 17. 瀬ノ原京跡群 |           |           |          |            |

【大野城市】

- |                |             |           |           |           |                  |              |
|----------------|-------------|-----------|-----------|-----------|------------------|--------------|
| 18. 原ノ畑遺跡      | 19. 大道端遺跡   | 20. ハザコ遺跡 | 21. 後原遺跡  | 22. 餅俣田遺跡 | (九州大学筑紫キャンパス遺跡群) |              |
| 23. 池田・池ノ上遺跡   | 24. 梅頭遺跡群   | 25. 本堂遺跡  | 26. 上園遺跡  | 27. 下大和度寺 | 28 (33). 谷川遺跡    | 29. 永福遺跡     |
| 30. 向田路遺跡      | 31. 末次遺跡    | 32. 天神田遺跡 | 34. 唐土遺跡  | 35. 父子船遺跡 | 36. 出口遺跡         | 37. 矢倉遺跡     |
| 38. 小水城周辺遺跡    | 39. 上大ノ小水城跡 | 40. 谷蟹遺跡群 | 41. 野添遺跡  | 42. 野添宮跡群 | 43. 花無尾遺跡        | 44. 平田1・2号京跡 |
| 45. 横峰I遺跡      | 46. 横峰II遺跡  | 47. 屏風田遺跡 | 48. 日ノ浦遺跡 | 49. 塚原遺跡群 | 50. 畑ヶ敷遺跡        | 51. 下ノ原遺跡    |
| 52. 月ノ浦遺跡      | 53. 正楽寺跡    | 54. 瀬ノ元古墳 | 55. 瀬ノ元京跡 | 56. 瀬ノ元遺跡 | 57. 大行事遺跡        | 58. 平野遺跡     |
| 59. 城ノ山京跡・不動城跡 | 60. 中通古墳    | 61. 中通遺跡  | 62. 中通古墳群 | 63. 中通京跡群 | 64. 後田宮跡群        | 65. 小田浦京跡群   |
| 66. 石坂京跡群      | 67. 大谷京跡群   | 68. 原浦京跡群 | 69. 原京跡   | 70. 井手宮跡群 | 71. ハセムシ京跡群      |              |

【太宰府市】

- |          |           |          |           |           |           |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 72. 島本遺跡 | 73. 神ノ前遺跡 | 74. 糺振遺跡 | 75. 宮ノ本遺跡 | 76. カヤノ遺跡 | 77. 京ノ尾遺跡 |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

### Ⅲ. 調査の成果

#### 1. 調査の概要

上園遺跡は、牛頸川の支流である平野川が形成した沖積地上に位置する。これまで16次におよぶ調査を実施し、古墳時代から中世にかけての集落跡が確認されている。

調査対象地は標高30m前後の平坦な土地で、調査前は水田として利用されていた。遺構面は、耕作土（50cm）を除去した後確認した。砂質土を基本とし、部分的に粘質土の堆積が認められる。

調査の結果、竪穴建物7軒・土坑8基・複数のピットを確認し、須恵器・土師器・土製品・石製品・鉄製品が出土した。

#### 2. 遺構と遺物

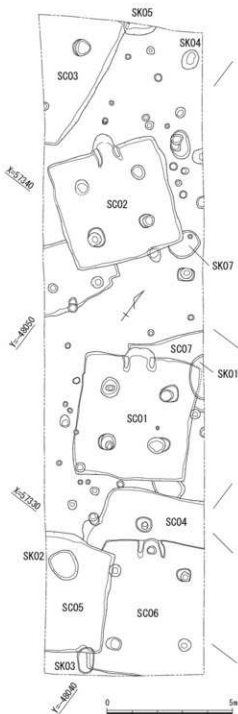
##### (1) 竪穴建物

###### SC01（第4図、図版2）

調査区中央に位置し、東壁をSK01に切られる。平面略方形で、北壁で4.6m、西壁で4.8m、最深部で30cmを測る。床面はほぼ平坦で、10～15cmの厚さで貼床を検出した。北壁中央に浅黄色粘質土でカマドを構築し、袖は高さ15cmほど残存する。カマド袖は北壁から屋内に60cmほど突出し、両袖間は床面で70cmを測る。カマド内部の床面上には灰層と考えられる灰褐色粘質土が堆積し、その上に黄褐色の焼土層が形成される。焼土層は被熱し、上面が硬化していた。また、カマド西袖には須恵器甕の胴部片が貼り付いており、カマド袖の補強に使われたとみられる。煙道側は壁外へ30cm突出している。支柱穴は4基で、平面円形あるいは楕円形を呈し、直径60～80cm、深さ40～60cmを測る。一部の柱穴は2段掘りである。カマド周辺からは須恵器蓋杯が複数個、住居壁面に立てかけられたような状態で出土した。

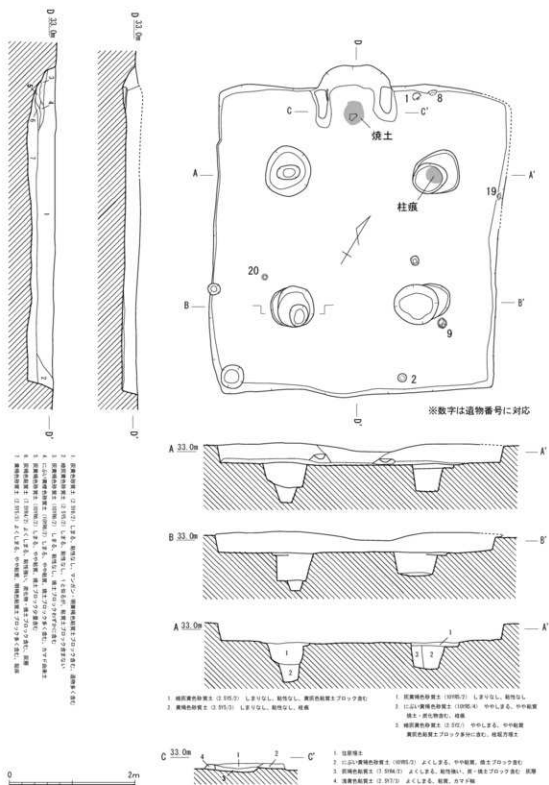
###### 出土遺物（第5・6図、図版7）

須恵器（1～26）1～6は杯H蓋。口径は13.3～14.0cmを測る。3は天井部が丸みを帯び、その他の天井部は平坦である。いずれも天井部は回転ヘラ



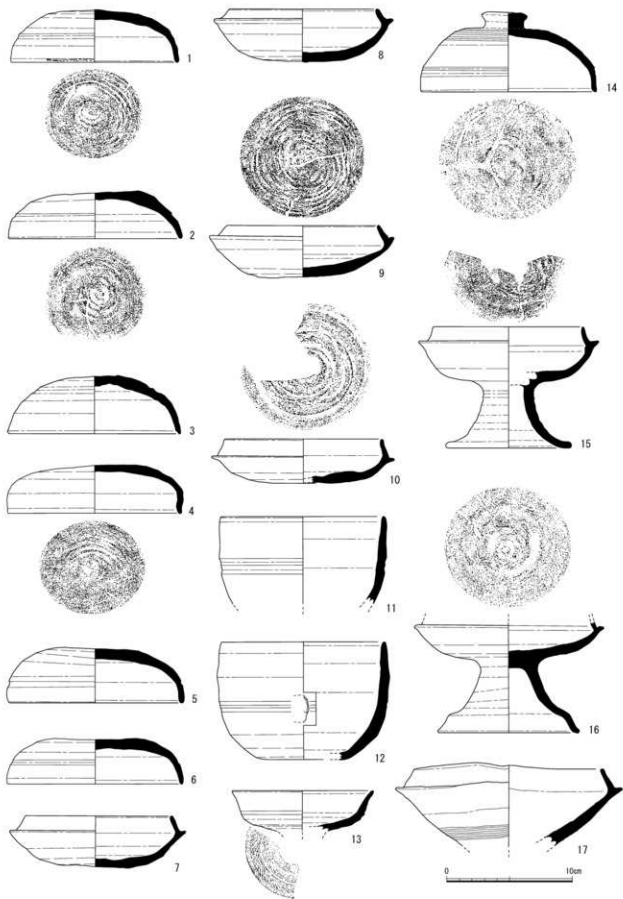
第3図 遺構配置図 (1/150)



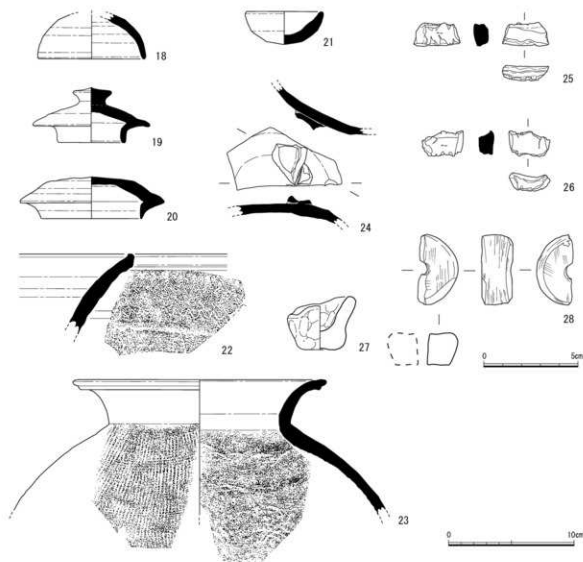


第4図 SC01実測図 (1/60)

ケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残るのが主体をなす。4を除き天井部と体部の境に浅い段もしくは沈線が廻る。また、3のみ口縁端部に浅い段が廻る。7～10は杯H身。口径11.7～12.6cm、最大径14.0～14.7cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。いずれも底部は回転ヘラケズリされ、9・10は内面に同心円文当て具痕が残る。11・12は椀。いずれも体部中央に2条の沈線が廻る。12は体部と底部の境が回転ヘラケズリされて丸みを



第5图 SC01出土遺物実測図① (1/3)

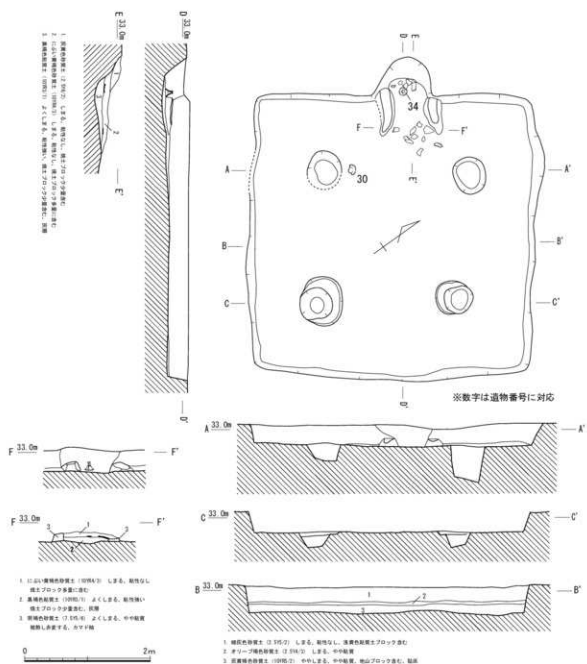


第6図 SC01出土遺物実測図② (25～28は1/2、その他は1/3)

帯びる。また、体部中央には把手とみられる粘土の貼り付け痕が認められる。

13は無蓋高杯である。杯部中央には稜が廻り、下半には楕円状の連続刺突文を施す。14は高杯蓋でボタン状のつまみがつく。天井部と体部の境には沈線が廻る。天井部にカキメが施され、内面には同心円文当て具痕がわずかに残る。15～17は有蓋高杯。15・16は短脚のもので、15は脚裾部がハの字状に開き、16はくの字形に屈曲する。いずれも杯部内面に同心円文当て具痕が残る。16は立ち上がりが打ち欠かれており、鋸歯状をなす。17は脚部を欠く。体部下半にはカキメが廻り、全体に焼き歪む。18～20は壺蓋。18は短頸壺に伴うものか。天井部は丸みを帯び、口縁端部は丸くおさめる。19・20は内面にかえりがつく。19は直立した長いかえりを有し、天井部にはつまみがつく。外面全体に降灰がみられる。20は厚ぼったく椎抽なつくり。短く内傾したかえりをもつ。天井部には棒状の工具を用いて不定方向のナデを施す。21は小型の杯だろうか。底部は丸みを帯び、体部は内湾気味にのびる。

22・23は甕。22は口縁部片で、端部は上方へわずかにつまみ出す。上下2段の波状文が廻る。23は口縁端部がM字状をなす。胴部は外面擬格子状のタタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。



第7図 SC02実測図 (1/60)

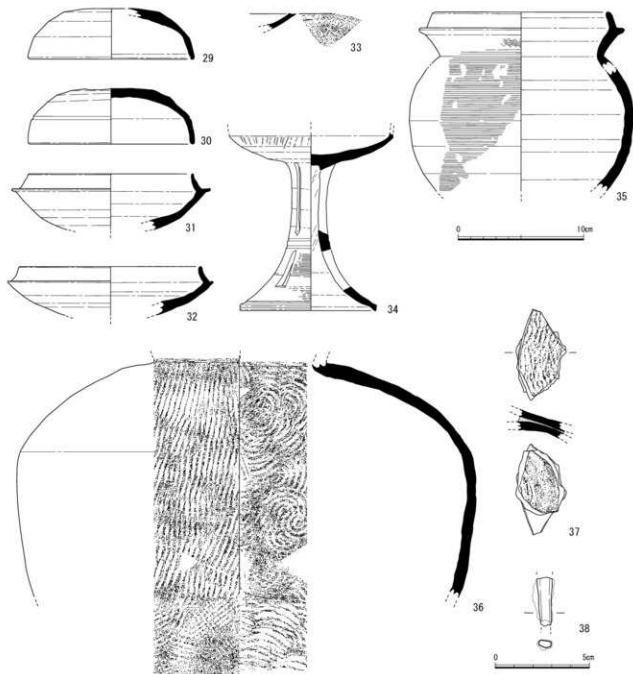
24は釉着資料。杯H蓋の天井部に、杯H身が釉着している。25・26は切削物で、いずれも須恵質である。片面にはケズリの痕跡が認められる。

土師器 (27) ミニチュアの鉢。手づくねで成形され、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

石製品 (28) 滑石製の紡錘車。断面逆台形をなし、表面は丁寧に研磨される。

### SC02 (第7図、図版3・4)

調査区北側に位置する。平面略方形で、北壁で4.25m、西壁で4.25m、最深部で35cmを測る。床面はほぼ平坦で、厚さ10～20cmの貼床を検出した。北壁中央に明褐色砂質土でカマドを構築し、袖は高さ15cmほど残存する。カマド袖は北壁から屋内に50cmほど突出し、両袖間は床面で50～90cmを測る。カマド内部は住居床面に比べて10cm程度くぼんでおり、内部には灰層と考えられる黒褐色粘質土が堆積し、その上に黄褐色の焼土層が形成される。煙道側は壁外

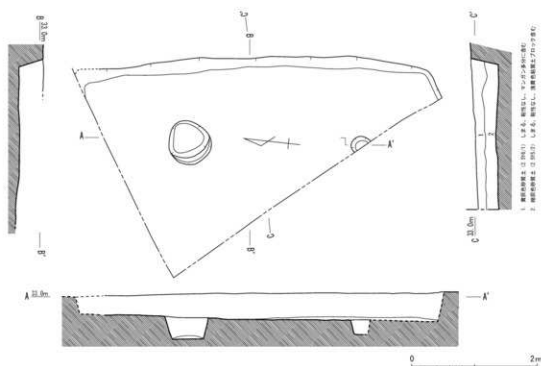


第8図 SC02出土遺物実測図（38のみ1/2、その他は1/3）

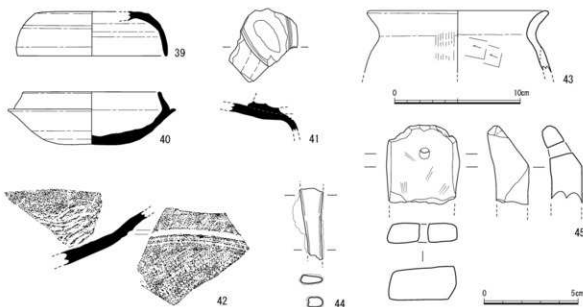
へ60cmほど突出する。カマド中央には須恵器高杯の脚部（第8図34）が据えられていた。支脚の可能性もあるが、明確な被熱は認められない。また、カマド周辺からは須恵器甕の胴部片（第8図36）がまとまって出土した。主柱穴は4基で、平面円形もしくは楕円形を呈し、直径50～60cm、深さ20～50cmを測る。

#### 出土遺物（第8図、図版8）

**須恵器（29～37）** 29・30は杯H蓋。いずれも口径13.2cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、30は天井部と体部の境に沈線が廻る。また、29は口縁部内面に浅い段が廻る。31・32は杯H身。口径13.2～14.6cm、最大径15.8～16.4cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は丸



第9図 SC03実測図 (1/60)

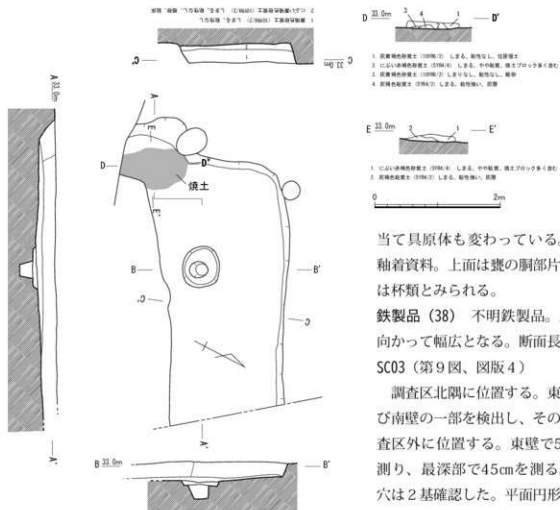


第10図 SC03出土遺物実測図 (44・45は1/2、その他は1/3)

くおさめる。底部は回転ヘラケズリされる。

33は甕で、口縁端部には面を有する。外面に波状文が廻る。34は無蓋高杯。外面には連続刺突文が廻る。脚部には長方形の透かしを上下2段、3方向に施す。上下の透かしは2条の沈線で画される。出土状況からカマドの支脚と想定されるが、顕著な被熱は認められない。

35は壺である。口縁部はくの字状を呈し、屈曲部には受け部が廻る。口縁部外面には波状文を施す。体部は球形をなし、外面にはカキメが廻る。36は甕の胴部。外面上半は平行タタキ、下半は擬格子タタキである。内面は同心円文当て具痕が残り、外面のタタキの変化と連動して、



第11図 SC04実測図 (1/60)

銅器・石製品・鉄製品が出土した。

#### 出土遺物 (第10図)

須恵器 (39～42) 39は杯H蓋。口径11.8cmを測る。天井部と体部の境に浅い沈線が廻る。天井部は回転ヘラケズリされる。40は杯H身で、口径11.0cm、最大径13.3cmを測る。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。底部は回転ヘラケズリされる。41は軸着資料。上面は杯H身、下面是杯H蓋とみられる。42は器台の小片。体部は口縁部に向かって外反する。外面は擬格子タタキ、内面は同心円文当てが具痕がみられる。外面には1条の沈線が廻り、その上下に波状文を施している。

土師器 (43) 小型の甕。胴部は外面ハケ、内面ケズリ、口縁部はヨコナデである。

鉄製品 (44) 不明鉄製品。上方に向かって幅広となり、厚さを減じる。断面長方形。

石製品 (45) 砂岩製の提碇で、折損する。残存長4.1cm、最大幅3.85cm、最大厚1.8cmを測り、上部に径5.0mmの穿孔を施す。いずれの面も砥面として使用する。

#### SC04 (第11図、図版4)

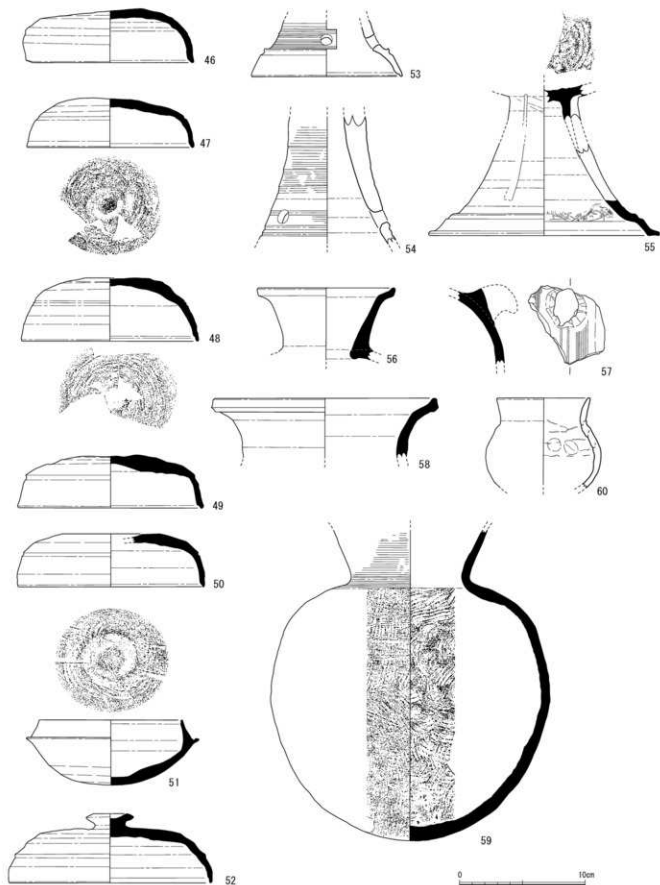
調査区南側に位置する。南半部分をSC05・SC06に切られ、東壁は調査区外にのびる。平面略方形とみられ、北壁は検出部分で3.6m、最深部で30cmを測る。西壁中央にはカマドに伴う

当て具本体も変わっている。37は軸着資料。上面は甕の胴部片、下面是杯類とみられる。

鉄製品 (38) 不明鉄製品。上方に向かって幅広となる。断面長方形。

#### SC03 (第9図、図版4)

調査区北隅に位置する。東壁および南壁の一部を検出し、その他は調査区外に位置する。東壁で5.5mを測り、最深部で45cmを測る。主柱穴は2基確認した。平面円形あるいは楕円形を呈し、直径30～60cm、深さ25～35cmを測る。須恵器・土



第12图 SC04出土遺物実測図 (1/3)



焼土の広がりを確認したが、カマド自体は失われていた。煙道側が壁外へ30cmほど突出している。床面上には灰層と考えられる灰褐色粘質土があり、その上に赤褐色の焼土層が堆積する。主柱穴は1基のみ確認した。平面円形を呈し、直径60cm、深さ25cmを測る。

#### 出土遺物（第12図、図版8）

須恵器（46～59） 46～50は杯H蓋。口径は13.3～14.8cmを測る。48は天井部に丸みを有するが、その他は天井部が平坦である。いずれも天井部は回転ヘラケズリされ、47・48の内面には同心円文当て具痕が残る。47～50は天井部と体部の境に浅い段もしくは沈線が廻る。また、48～50は口縁端部に浅い段が廻り、46・47は口縁部を丸くおさめる。51は杯H身。口径11.4cm、最大径13.8cmを測る。立ち上がりは高く、口縁端部に浅い段がつく。深みのある器形で、底部は丸みを帯びる。底部外面は回転ヘラケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残る。52は高杯蓋で、口径15.4cmを測る。天井部には、頂部がくぼんだ扁平なつまみがつく。天井部と体部の境に稜が廻り、口縁端部に段を有する。天井部は回転ヘラケズリされる。

53～55は高杯の脚部。53・54はいわゆる赤焼きで、53は脚裾付近に稜線が廻り、稜線より上位にはカキメおよび円孔を施す。脚端部内面には段が廻る。54は脚裾付近に円孔が2つ穿たれる。外面にはカキメが廻る。55は3方向に透かしを施す。脚裾部はくの字に屈曲し、内面には葉状の植物痕跡が認められる。杯部はわずかに残存し、内面に同心円文当て具痕が残る。

56は瓶類の口縁部で、端部は上方へつまみ出される。57は提瓶の肩部片。把手は先端を欠くが、鈎状をなすものとみられる。外面には2条の沈線とカキメが廻る。58・59は甕。58は口縁部が肥厚し、端部は上方へつまみ出される。59は小型の甕で、頸部が締まる。頸部は外面カキメ、内面ナデ。胴部は外面が擬格子タタキのち一部カキメ、内面には同心円文当て具痕が残る。

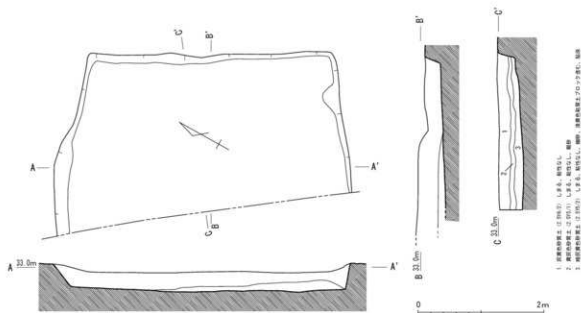
土師器（60） 60は小壺。口縁部は直線的に開き、胴部は球形をなす。内外面ナデ調整。内面には粘土紐の繋ぎ目が明瞭に残る。

#### SC05（第13図、図版4）

調査区南端に位置する。東壁および南北壁の一部を検出し、その他は調査区外に位置する。平面略方形とみられ、東壁は3.8m、最深部で40cmを測る。床面はほぼ平坦で、貼床を10～15cmの厚さで検出した。主柱穴やカマドの痕跡は確認できなかった。

#### 出土遺物（第14・15図、図版8）

須恵器（61～77） 61・62は杯H蓋。61は口径12.5cmを測り、平坦な天井部で、体部との境には鋭い稜が廻る。天井部外面は回転ヘラケズリされ、口縁部外面には縄目状の圧痕が廻る。62は口径13.4cmで、器高が高く、天井部は丸みを帯びる。天井部と体部の境には鈍い稜が廻り、口縁端部には浅い段がつく。天井部は回転ヘラケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残る。63～66は杯H身。口径11.0～12.2cm、最大径13.0～15.0cmを測る。立ち上がりは内傾し、底部は丸みを帯びる。65は口縁端部に浅い沈線が廻り、その他は丸くおさめる。底部外面はいずれも回転ヘラケズリされ、65・66の内面には同心円文当て具痕が残る。



第13図 SC05実測図 (1/60)

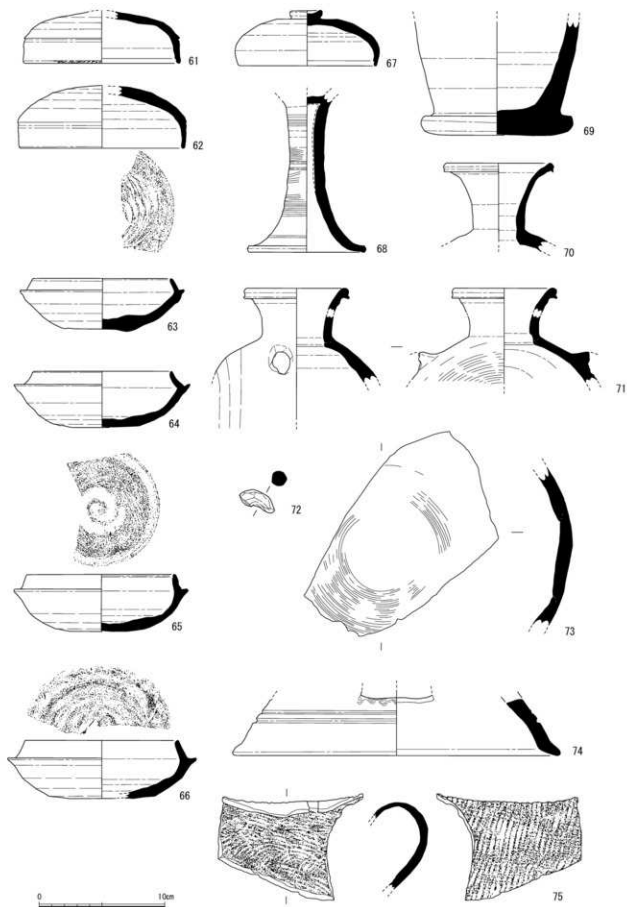
67は高杯蓋で、口径10.8cmを測る。頂部がくぼんだボタン状のつまみがつく。天井部は丸みを帯び、口縁部に向かってやや内湾する。口縁端部には段が廻る。天井部は回転ヘラケズリされる。68は高杯の脚部。長脚のもので、全体にカキメを施す。中央には2条の沈線が廻る。69は白である。底部はぶ厚い円盤状を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。円盤側部は面取りされ、底面は回転ヘラケズリされる。70～73は提瓶。70は頸部が長く、口縁端部に稜が廻る。71は頸部が短く、肩部に把手がつく。口縁端部には稜が廻る。胴部は片面が回転ヘラケズリされ、もう片面にはカキメが廻る。72は把手で、鉤状を呈する。73は胴部片で、外面にはカキメが廻り、内面には円盤閉塞の痕跡が残る。74は器台の脚部。やや内湾しながら脚端部へ至る。外面に2条の沈線と波状文が廻り、透かしを施す。

75～77は甕。75は胴部片で、大きく焼き歪む。外面には擬格子タタキ、内面には同心円文当て具痕が残る。76は口縁部が大きく外反し、端部は肥厚する。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。77は大甕で、口縁端部がM字状をなす。外面には波状文を上下2段施す。また、波状文の下位には、2条の沈線が廻る。胴部外面は平行タタキ、内面には同心円文当て具痕が残る。

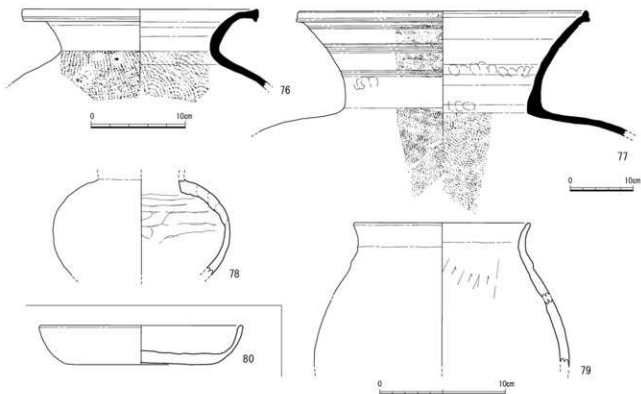
土師器 (78～80) 78は壺で、胴部は球形をなす。外面ナデ、内面には粘土紐の繫ぎ目が明瞭に残る。79は甕。口縁部はわずかに外反する。外面は摩滅して調整は不明、内面にはケズリを施す。80は杯。口縁部に向かってやや内湾し、底部と体部の境は丸みを帯びる。底部に板状圧痕がみられる。SC06の床面で出土したが、当該期の遺物に類例が見出せず、後世の遺構を認識できずに掘り下げてしまい、混ざり込んだ可能性も残る。

#### SC06 (第16図、図版5・6)

調査区南端に位置する。西壁および南北壁の一部を検出し、その他は調査区外へとのびる。西壁はSC05に切られている。平面略方形とみられ、西壁は5.1m、北壁は検出部分で3.8m、最深部で20cmを測る。床面は平坦で、10cm程度貼床されていた。主柱穴は4基で、平面円形



第14図 SC05出土遺物実測図① (1/3)



第15図 SC05出土遺物実測図② (76は1/4、77は1/6、その他は1/3)

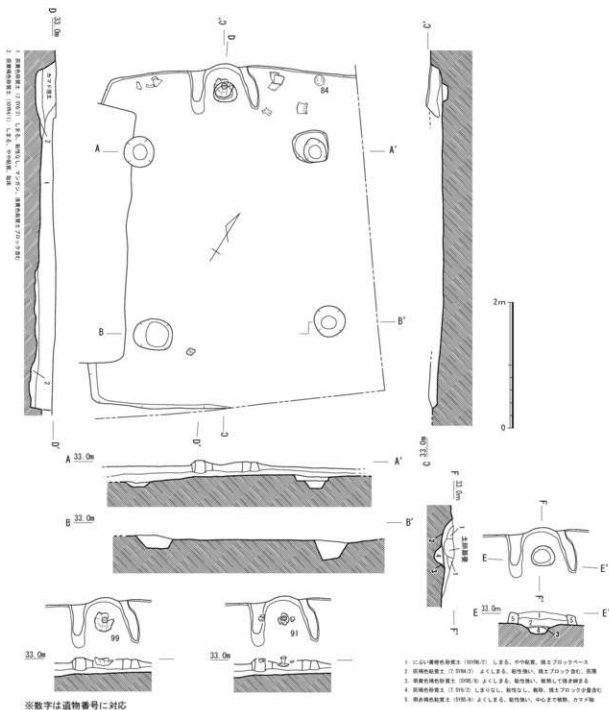
もしくは楕円形を呈し、直径50～60cm、深さ10～30cmを測る。

北壁中央には明赤褐色粘質土でカマドを構築し、袖は高さ20cmほど残存する。カマド袖は北壁から屋内に0.7mほど突出し、両袖間は床面で50～70cmを測る。カマド中央には径30cmのピットがあり、灰褐色の粗砂で充填されていた。その上面は強く被熱し、硬く焼きしめる。カマド内部の床面上には灰層と考えられる灰褐色粘質土が堆積していた。カマド中央には支脚の可能性のある須恵器の無蓋高杯（第17図91）が逆位で据えられていた。また、カマドにかけられた土師器甕（第18図99）が落ち込み、甕の底部に支脚が貫通した状態であった。カマドの周辺では、須恵器杯類や土師器甕などがまとめて出土した。

#### 出土遺物（第17・18図、図版8・9）

須恵器（81～97） 81～84は杯H蓋。口径13.0～14.4cmを測る。いずれも天井部は平坦で、81・82は体部との境に沈線が廻る。82は口縁部内面に浅い段を有し、その他は丸くおさめる。天井部外面は回転ヘラケズリされ、81・82の内面には同心円文当て具痕が残る。82は大きく焼き歪み、84は酸化炎焼成のため赤褐色を呈す。85～87は杯H身。口径11.4～12.9cm、最大径13.7～14.7cmを測る。立ち上がりは内傾し、85・87の口縁部内面には浅い沈線が廻る。底部外面はいずれも回転ヘラケズリされ、85・87の内面には同心円文当て具痕、86は平行文当て具痕が残る。85の外面には別固体が軸着し、87は大きく焼き歪む。

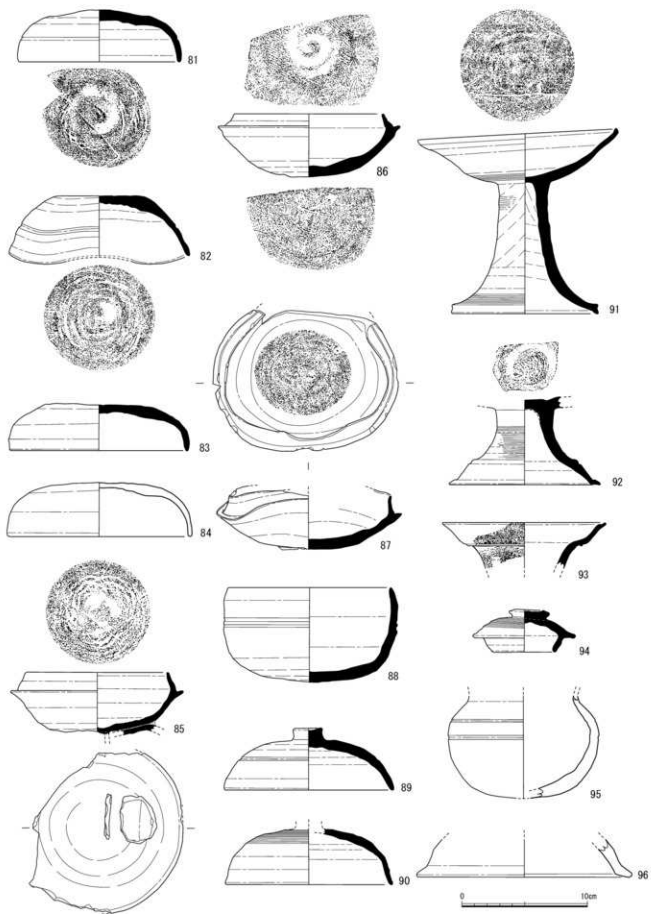
88は椀で、口縁部は内湾する。外面中央に2条の沈線が廻り、底部は回転ヘラケズリされる。89・90は高杯蓋。89はボタン状のつまみがつき、天井部と体部の境に沈線が廻る。90は天井



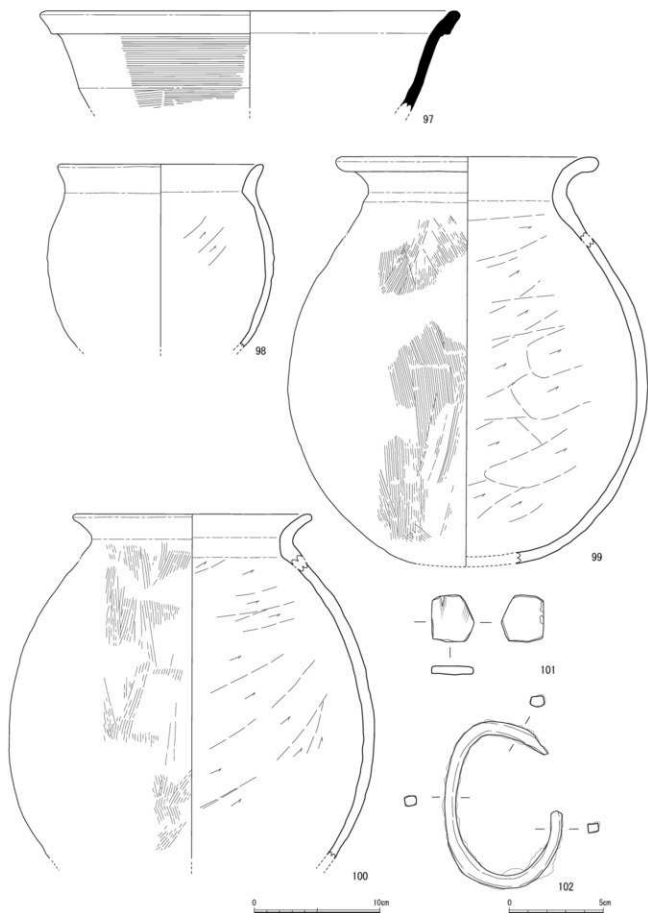
第16図 SC06実測図 (1/60)

部にカキメを施す。91・92は高杯。91は通常の高杯と形態が大きく異なる。杯部は、底部が丸みを帯び、体部から口縁部に向かってやや外反する。口縁端部は上方へとつまみ出される。外面にはカキメが廻り、内面には同心円文当て具痕が残る。脚部はハの字状に開き、端部は短く垂下する。出土状況からカマドの支脚と想定されるが、顕著な被熱は認められない。92は裾部が屈曲し、端部は外へとつまみ出される。外面にカキメを施し、杯部内面には同心円文当て具痕が残る。

93は甕。頸部と口縁部の境は屈曲し、屈曲部には稜が廻る。口縁端部には沈線を施す。口縁部および頸部には波状文が廻る。94は壺蓋で、内面に内傾するかえりを有し、ボタン状の



第17图 SC06出土遺物実測図① (1/3)



第18図 SC06出土遺物実測図② (101・102は1/2、その他は1/3)

つまみがつく。天井部外面にはカキメを施す。95・96は赤焼き須恵器。95は壺で、胴部は球形をなす。外面に2条の沈線が廻る。96は高杯か。裾部は内湾し、端部は外へと踏ん張る。97は器台。口縁部に向かってやや外反し、端部外面は肥厚する。外面にはカキメを施し、内面には同心円文当て具痕が薄く残る。

土師器 (98～100) 98～100は甕である。98は球胴をなし、外面は摩滅し調整不明瞭。内面は斜め方向のケズリを施す。99・100は長胴をなし、口縁部は短く外反する。胴部は外面ハケ後ナデ、内面はケズリである。口縁部は内外面ともにナデである。

石製品 (101) 101は、滑石片。略方形をなす。

鉄製品 (102) 102は不明鉄製品で、平面楕円のリング状を呈する。断面は長方形で、片方の先端部分が尖る。

#### SC07 (第19図、図版6)

調査区中央に位置する。北壁および南壁の一部を確認した。西壁および南壁はSC01に切られ、東壁は調査区外へのびることから、詳細な平面形態は不明確である。深さは、最深部で20cmを測る。

#### 出土遺物 (第20図)

須恵器 (103) 杯H蓋で、口径12.3cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。

### (2) 土坑

#### SK01 (第21図、図版6)

調査区中央で検出した。平面楕円形で、東半部は調査区外へのびる。長さ1.8m、最深部で15cmを測る。底面は平坦で、断面逆台形をなす。土師器・黒色土器の小片が出土した。

#### 出土遺物 (第22図)

土師器 (104) 椀の高台部。高台は逆台形をなす。回転ナデ調整。

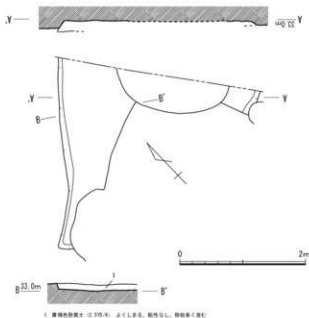
土製品 (105) 方形の土製品。小片のため、本来の形態は不明。各面は丁寧になでられ、土師質に焼成される。土器焼成に伴う棒状土製品の類か。

#### SK03 (第21図)

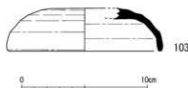
調査区南端で検出した。SC03・SC06を切る。平面楕円形をなし、長さ1.0m、幅65cm、最深部で10cmを測る。底面は平坦で、断面逆台形を呈する。土師器・黒色土器の小片が出土した。

#### 出土遺物 (第22図)

黒色土器 (106) 黒色土器B類の椀。体部は内湾気味にのび、口縁端部は丸くおさめる。内外

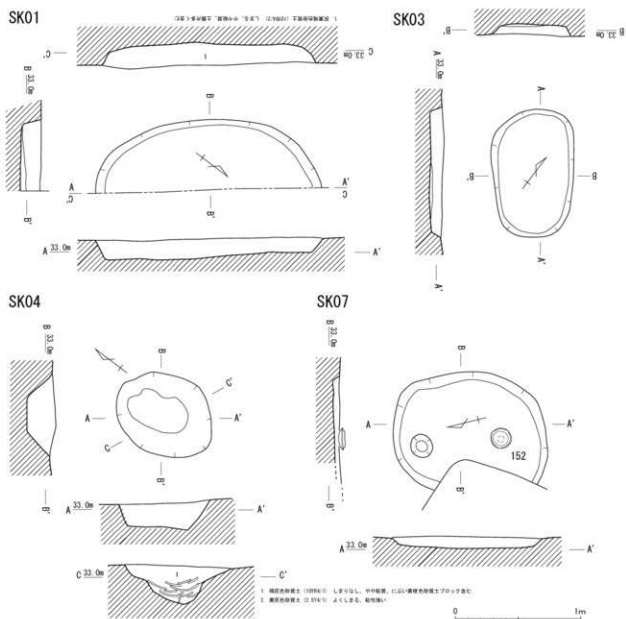


第19図 SC07実測図 (1/60)

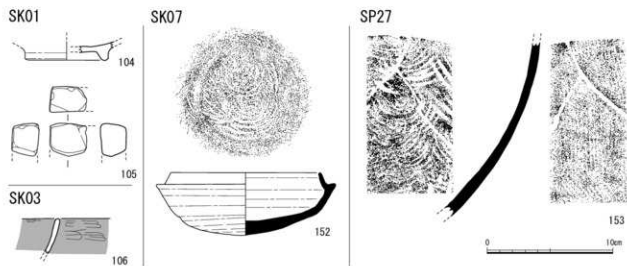


第20図 SC07出土遺物実測図 (1/3)





第21図 SK01・03・04・07実測図 (1/30)



第22図 SK01・03・07・SP27出土遺物実測図 (1/3)

面に横位のミガキを施す。

#### SK04 (第21図、図版4)

調査区北端で検出した。平面楕円形で、長さ85cm、幅65cm、最深部で20cmを測る。底面は平坦で、断面逆台形をなす。小皿、丸底杯、椀が折り重なるように出土した。

#### 出土遺物 (第23図、図版9・10)

土師器 (107～142) 107～119は小皿。口径10～11cm、器高1.2～1.4cmにまとまる。いずれも底部へラ切りで、未調整のものとナデを施すものがある。摩滅して不鮮明なものを除き、底部には板状圧痕が残る。口縁部は緩やかに開き、端部は丸くおさめる。色調はいずれも浅黄色を呈し、焼成はやや甘く軟質である。120～141は丸底杯。口径14.6～16.4cm、器高3.2～3.8cmを測る。平底の杯の底部を押し出して丸底とするもので、体部中位に屈曲を残す。底部はすべてへラ切りで、板状圧痕を残すものもある。口縁端部は丸くおさめるものと、外側へとわずかにつまみ出すものがある。外面下半には指頭痕、内面にはコテ当て痕跡が残る。142は椀。丸底杯に高台を付したものである。外面下半に指頭痕、内面にコテ当て痕跡が残る。外側へと踏ん張る高台がつく。

黒色土器 (143～151) 143～149は黒色土器A類。143・144は丸底杯。通常のものと同形態、技法ともに差異はない。145～149は椀で、口径14.4～16cm、器高5.7～6.2cmを測る。いずれも半球状の深みのある体部を呈し、ハの字に開く高い高台がつく。口縁端部は外側へとつまみ出される。押し出し技法により成形され、外面下半には指頭痕が残る。内面にはミガキが施され、一部にはコテ当て痕跡がみられる。150・151は黒色土器B類。口径14.2～15.6cm、器高5.5cmを測る。器形はA類と差異はない。150は器面が荒れて調整不明瞭だが、151は内外面ともにミガキが施される。

#### SK07 (第21図)

調査区中央で検出した。SC02に切られる。平面楕円形で、長さ1.2m、幅90cm、深さ10cmを測る。

#### 出土遺物 (第22図、図版9)

須恵器 (152) 杯H身。口径11.9cm、最大径14.3cmを測る。立ち上がりは内傾し、口縁部内面には浅い沈線が廻る。底部外面は回転ヘラケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残る。

#### (3) ピット

須恵器 (153) 甕の胴部片。外面擬格子タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。SP27出土。

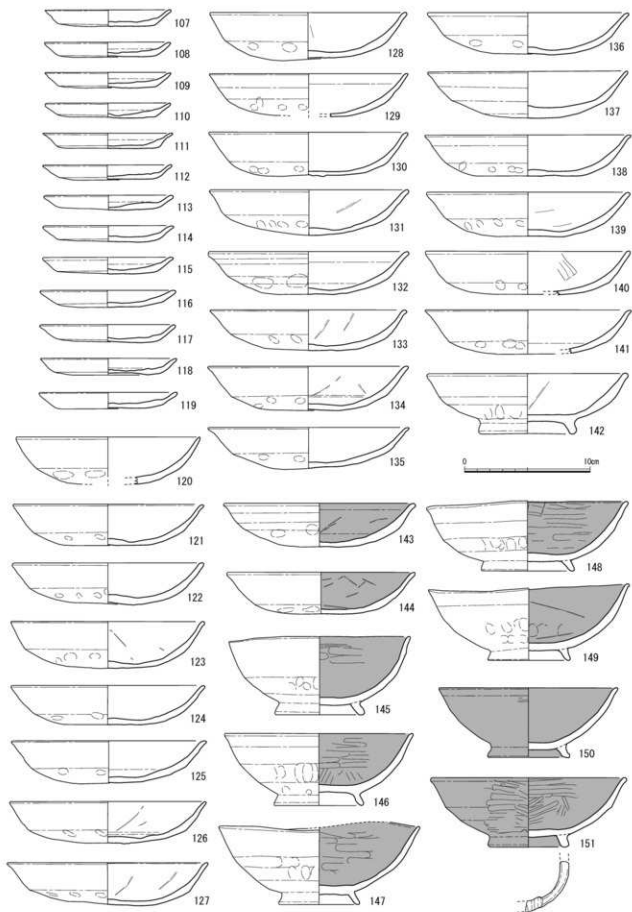
#### (4) その他の出土遺物

ここでは、遺構検出および表土剥ぎで出土した遺物を報告する。

#### SC04～06一段下げ時出土遺物 (第24図)

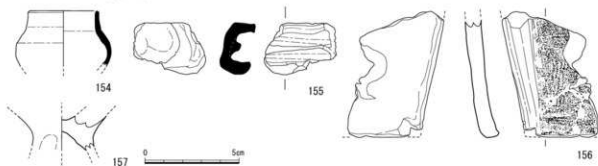
須恵器 (154・155) 154は小型壺。胴部は球形で、口縁部は垂直にのびる。内外面回転ナデ調整。155は器種不明。突帯が3条並び、断面は山の字状をなす。手づくねにより成形される。

土師器 (156・157) 156は移動式カマドの焚口部分。焚口側部には断面台形の突帯が付されており、おそらく庇へと連結するものだろう。外面は平行タタキ、内面には薄く同心円文当て

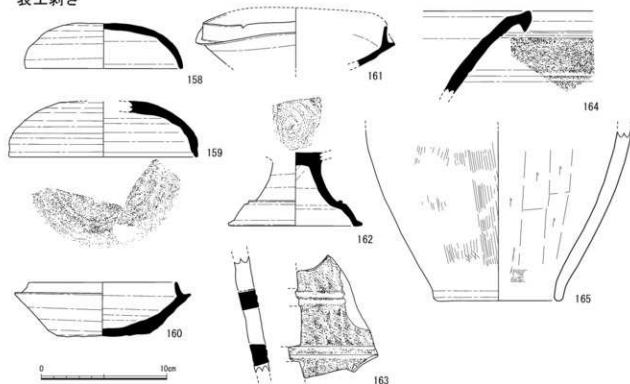


第23図 SK04出土遺物実測図 (1/3)

SC04 ~ 06 一段下げ



表土剥ぎ



第24図 SC04 ~ 06一段下げ・表土剥ぎ出土遺物実測図 (155・157は1/2、その他は1/3)

具の痕跡が残る。

157は鉢形のミニチュア土器。手づくね成形である。

表土剥ぎ出土遺物 (第24図)

須恵器 (158 ~ 164) 158・159は杯H蓋。いずれも天井部は回転ヘラケズリされる。158は口縁端部を丸くおさめ、159は口縁部内面に浅い段が廻る。160・161は杯H身。160は底部回転ヘラケズリされる。161は大きく焼き歪む。口縁部内面には浅い沈線が廻る。162は高杯。裾部はくの字に屈曲し、屈曲部には1条の突帯が廻る。杯部内面には同心円文当て具痕が残る。163は波状文と2条1組の沈線を交互に施し、方形の透かしをあげる。164は甕で、沈線と波状文が交互に施される。

土器器 (165) 165は甕。体部は下方に向かって内湾し、端部は垂直気味にのびる。外面に縦方向のハケ、内面の底部付近のみ横位のハケで、その他は縦方向のケズリを施す。

第1表 遺物観察表①

遺物 番号	種類	素材	出土地点	位置(m-c) [1]遺物番号と遺物所在層番号 記載最大層(仮元層)の(層番号)	形態・技法・文様の特徴	A:赤土 B:灰産 C:土調			備考
						A:赤土	B:灰産	C:土調	
1	漆器	丹漆	SC01	①13.3 ②1.15	天身部外面回転ヘラツキ 天身部内面当て具類 他は回転ナデ 外周中位2条の浅溝がのこる	A:3mm以下白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N77 灰白色		1層部内面腐蝕 痕あり	
2	漆器	丹漆	SC01	①13.7 ②3.8	天身部外面回転ヘラツキ 天身部内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N8 灰白色			
3	漆器	丹漆	SC01 DF	①13.8.0 ②4.5	天身部外面回転ヘラツキ 天身部内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N8 灰白色			
4	漆器	丹漆	SC01 DF	①13.8 ②3.7	天身部外面回転ヘラツキ 天身部内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N77 灰白色			
5	漆器	丹漆	SC01 CF	①13.9 ②4.4	天身部外面回転ヘラツキ 天身部内面当て具類 他は回転ナデ 外周中位2条の浅溝がのこる	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:中々不具 C:内9N77 灰白色 焼N77 灰白色			
6	漆器	丹漆	SC01	①14.0 ②3.5	天身部外面回転ヘラツキ 天身部内面当て具類 他は回転ナデ 外周中位2条の浅溝がのこる	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:中々不具 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色			
7	漆器	丹漆	SC01 AIF	①11.7 ②1.4 変形部(14.0)	底面外面回転ヘラツキ 底面内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8/N77 灰白色			
8	漆器	丹漆	SC01	①11.7 ②1.15 変形部14.2	底面外面回転ヘラツキ 底面内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8/N77 灰白色			
9	漆器	丹漆	SC01	①12.2 ②1.15 変形部14.7	底面外面回転ヘラツキ 底面内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色 焼N77 灰白色		外面腐蝕 痕あり	
10	漆器	丹漆	SC01 DF	①12.4 ②3.5 変形部14.6	底面外面回転ヘラツキ 底面内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色		外面腐蝕 痕あり	
11	漆器	丹漆	SC01 DF	①12.4 ②3.5 変形部14.6	底面外面回転ヘラツキ 底面内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色		外面腐蝕 痕あり	
12	漆器	丹漆	SC01 CF	①13.0 ②1.3	内外面回転ナデ 外周中位2条の浅溝がのこる	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色		内面腐蝕 痕あり	
13	漆器	丹漆	SC01 CF	①13.0 ②3.3	内外面回転ナデ 外周中位2条の浅溝がのこる	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色		内面腐蝕 痕あり	
14	漆器	丹漆	SC01 AIF	①14.0 ②3.5 つまみ13.8 つまみ13.1	天身部外面回転ヘラツキ 天身部内面当て具類 他は回転ナデ 外周中位2条の浅溝がのこる	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色		内面腐蝕 痕あり	
15	漆器	丹漆	SC01 CF	①12.1 ②3.6 変形部(14.2) 脚部径10.0	杯底外面回転ヘラツキ 杯底内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色		杯底外面 腐蝕痕あり	
16	漆器	丹漆	SC01 AIF	①8.7 ②変形部15.0 脚部径11.2	杯底外面回転ヘラツキ一部ホキ 杯底底面内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色			
17	漆器	丹漆	SC01 AIF	①15.1 ②変形部 変形部(13.0)	杯底外面回転ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色		器入内	
18	漆器	丹漆	SC01 CF	①16.0 ②3.5	内外面回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色			
19	漆器	丹漆	SC01	①5.3 ②変形部13.3 つまみ13.3 つまみ13.4	天身部外面回転ヘラツキ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N8 灰白色			
20	漆器	丹漆	SC01	①6.0 ②3.3	天身部外面回転ヘラツキ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼N5 灰白色			
21	漆器	丹漆	SC01 DF	①6.2 ②2.6	ナデ成形	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色			
22	漆器	丹漆	SC01 CF	①16.4	内外面回転ナデ 外面腐蝕文あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N7 灰白色			
23	漆器	丹漆	SC01 C:赤土	①20.1 ②10.7	杯底外面回転ナデ 杯底内面当て具類 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N7 灰白色		1層部内面腐蝕 痕あり	
24	漆器	丹漆	SC01 CF		外面回転ヘラツキ 内面回転ナデ	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰色			
25	漆器	丹漆	SC01 DF	長51.3 幅25.5 厚30.6	ナデナデ	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰色			
26	漆器	丹漆	SC01 DF	長51.3 幅25.5 厚30.75	ナデナデ	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰色			
27	土師器	丹漆	SC01 DF	①3.6 ②2.8 ③2.2	ナデ成形	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色			
28	土師器	丹漆	SC01 A:赤土	長55.7 最大幅1.9 厚31.7				滑り痕	
29	漆器	丹漆	SC02 脚部径	①13.2 ②4.0	天身部外面回転ヘラツキ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒 貝粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色			
30	漆器	丹漆	SC02	①13.2 ②4.4	天身部外面回転ヘラツキ 他は回転ナデ 外周中位2条の浅溝がのこる	A:3mm以下の白色・黒色砂粒 貝粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色		外面腐蝕 痕あり	
31	漆器	丹漆	SC02 AIF	①13.2 ②4.4 変形部(15.8)	底面外面回転ヘラツキ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N5 灰白色 焼N8 灰白色			
32	漆器	丹漆	SC02 DF	①14.6 ②変形部 変形部(14.4)	底面外面回転ヘラツキ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:中々不具 C:内9N77 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色			
33	漆器	丹漆	SC02 DF	①1.2	内外面回転ナデ 外面腐蝕文あり	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼N6 灰白色		内面腐蝕 痕あり	
34	漆器	丹漆	SC02	①14.1 脚部径13.0 脚部径10.9	内外面回転ナデ 脚部内面当て具類 脚部外周縁 腐蝕文あり 外周中位2条の浅溝がのこる 脚部内面当て具類 脚部外向浅溝がのこる	A:黒褐色白砂粒 貝粒 炭粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色			
35	漆器	丹漆	SC02 中子内	①14.2 ②14.2 ③17.0 変形部(16.2)	杯底外面回転ヘラツキ一部ホキ 杯底外面腐蝕文あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N77 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色		外面腐蝕 痕あり	
36	漆器	丹漆	SC02 中子内	①14.0 ②変形部 変形部(14.7)	杯底外面回転ヘラツキ一部ホキ 杯底内面当て具類	A:黒褐色白砂粒 炭粒 炭粒を含む B:貝殻 C:内9N5 灰白色 焼N7 灰白色 焼N4 灰白色			
37	漆器	丹漆	SC02 AIF		底面外面回転ナデ	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色			
38	漆器	丹漆	SC02 CF	脚部径15.5 最大幅1.8 厚30.5 重2.2g	底面外面回転ナデ 杯底内面当て具類	A:黒褐色白砂粒 貝粒 炭粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色			
39	漆器	丹漆	SC03	①11.0 ②3.5	天身部外面回転ヘラツキ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼N8 灰白色			
40	漆器	丹漆	SC03 AIF	①11.0 ②変形部 変形部(13.3)	杯底外面回転ヘラツキ 杯底内面当て具類 ナデ 一部当て具 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒 炭粒 炭粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼N5 灰白色			
41	漆器	丹漆	SC03 DF		杯底外面回転ナデ 2条の浅溝あり	A:黒褐色白砂粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼N4 灰白色			
42	漆器	丹漆	SC03		杯底外面回転ナデ 外周中位2条の浅溝 がのこる 内面回転ナデ文あり	A:3mm以下の白色砂粒 炭粒 炭粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼N5 灰白色		内面腐蝕 痕あり	
43	土師器	丹漆	SC03 DF	①14.0 ②2.1	杯底外面回転ナデ 杯底内面当て具類 他はナデ	A:3mm以下の白色砂粒 炭粒 炭粒を含む B:貝殻 C:内9N6 灰白色 焼2.0V4.3焼4.9アア灰白色			
44	漆器	丹漆	SC03 一貫下付	脚部径17.5 最大幅1.2 厚30.5 重2.6g					

第2表 遺物観察表②

遺物 番号	種類	素材	出土地点	位置(m) ①(正確な位置)高さ(埋没深さ)表面 ②(正確な位置)高さ(埋没深さ)表面 ③(正確な位置)高さ(埋没深さ)表面	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:胎成 C:色調	備考	
45	瓦器類	磁石	SC01	HEC	西14.3 ① 43.3 ② 最大厚1.8			砂岩質
46	瓦器類	伴器	SC01	HEC	①:43.3 ②:4.3	天井部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ	A:5cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N色 胎成 N6; 灰色→N5; 白色	
47	瓦器類	伴器	SC04	AIE	①:43.3 ②:3.9	天井部内面凹形→フラズ 天井部内面凹形具輪 他は凹形ナゾ 胎成中心部の位置が不明	A:2cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
48	瓦器類	伴器	SC04B SC04AIE	①:43.1 ②:5.0	天井部内面凹形→フラズ 天井部内面凹形具輪 他は凹形ナゾ 胎成中心部の位置が不明	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	胎土赤い	
49	瓦器類	伴器	SC04	AIE	①:(14.8) ②:4.2	天井部内面凹形→フラズ 天井部内面凹形具輪 他は凹形ナゾ	A:2cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
50	瓦器類	伴器	SC04	AIE	①:(14.8) ②:4.2	天井部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ 胎成中心部の位置が不明	A:4cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
51	瓦器類	伴器	SC04	AIE	①:(11.4) ②:0.15 ③:厚さ13.8	胎成内面凹形→フラズ 胎成内面凹形具輪 他は凹形ナゾ	A:胎成を明確に含む 胎土質 C:内面N7; 灰白色	
52	瓦器類	瓶類	SC04	AIE	①:(15.4) ②:5.5 つまみ径 3.7 つまみ高1.25	天井部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ	A:4cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
53	瓦器類	高杯	SC04	DEC	①:(4.5) 胴部径(12.0)	外輪一部キタメ 他は凹形ナゾ 1ヶ所片立ち	A:胎成を白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
54	瓦器類	高杯	SC04	AIE	①:(19.4)	外輪キタメ 内面ナゾ 門前の片立ち部分	A:3cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
55	瓦器類	高杯	SC04	DEC	①:(11.3) 胴部径(15.3) 胴部径(18.4)	外輪内面凹形具輪 他は凹形ナゾ 片立ち部分なし 胎成内面片立ち部分のみ	A:3cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
56	瓦器類	瓶類	SC04	AIE	①:(11.0) ②:(3.7)	内面凹形ナゾ	A:1cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	内面凹形ナゾ
57	瓦器類	瓶類	SC04	DEC	①:(6.3)	外輪→フラズ径キタメ 内面ナゾ	A:3cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
58	瓦器類	甕	SC04 AIE	DEC	①:(18.0) ②:(4.7)	内面凹形ナゾ	A:2cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
59	瓦器類	甕	SC04	DEC	①:(24.0) ②:(22.2) 胴部径(9.4)	底部外面隆起ナゾ 胎成内面凹形具輪 胎成外輪キタメ	A:胎成を白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
60	土師器	小壺	SC04	AIE	①:(7.4) ②:(6.6)	内面凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
61	瓦器類	伴器	SC06	HEC	①:(10.3) ②:(4.1)	天井部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ 外輪中心部の位置が不明 1ヶ所胎成面片立ちのみ	A:胎成を明確に含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	胎土赤い
62	瓦器類	伴器	SC06	AIE	①:(13.4) ②:(5.6)	天井部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N7; 灰白色→N4; 白色	1ヶ所胎成面片立ち
63	瓦器類	伴器	SC06	AIE	①:(11.0) ②:(4.2) 受部径13.0	底部外面凹形→フラズ 胎成内面凹形具輪か 他は凹形ナゾ	A:2cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	胎成面片立ち 胎成内面凹形ナゾ
64	瓦器類	伴器	SC06	HEC	①:(11.1) ②:(4.5) 受部径14.0	底部外面凹形→フラズ 胎成内面凹形具輪 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
65	瓦器類	伴器	SC06	AB-6-5	①:(11.8) ②:(4.5) 受部径(13.8)	底部外面凹形→フラズ 胎成内面凹形具輪 他は凹形ナゾ	A:2cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	胎成面片立ち
66	瓦器類	伴器	SC06	HEC	①:(12.2) ②:(4.6)	底部外面凹形→フラズ 胎成内面凹形具輪 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N7; 灰白色→N2; 白色	胎土赤い
67	瓦器類	高杯形	SC06	HEC	①:(10.5) ②:(4.4) つまみ径5.7	内面凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N7; 5.7/17.1 灰白色→7.5/13.4 白色	外輪面片立ち
68	瓦器類	高杯	SC06	HEC	①:(12.0) 胴部径(9.4)	外輪キタメナゾ 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色砂粒 緑色を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
69	瓦器類	高杯	SC06	AIE	①:(9.0) ②:(12.0)	底部外面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒 緑色を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N5; 灰色 N6; 灰白色 2.5/14.2 黄褐色 2.5/16.3 黄褐色→N4; 白色	内面一部隆起
70	瓦器類	瓶類	SC06	HEC	①:(8.0) ②:(8.25)	内面凹形ナゾ	A:3cm以下の白色砂粒 胎成を黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6; 灰白色 2.5/20.1/1 オリーブ灰 色→N6; 白色	
71	瓦器類	瓶類	SC06	AIE	①:(8.3) ②:(7.35)	外輪キタメ 凹形→フラズ 内面凹形ナゾ	A:4cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	1ヶ所胎成面片立ち 1ヶ所胎成面片立ち
72	瓦器類	瓶類	SC06	AIE	①:(1.80)	ナゾ	A:胎成を白色砂粒を含む 胎土質 C:胎成 N6; 胎成 N4; 白色	
73	瓦器類	瓶類	SC06	HEC	①:(18.2)	外輪キタメ 内面ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒 緑色を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N7; 17.1 灰白色→16.4 白色	外輪面片立ち
74	瓦器類	甕	SC06	HEC	①:(4.4) ②:(2.6)	内面凹形ナゾ 外輪面片立ちに濃状文を施す	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
75	瓦器類	甕	SC06	HEC	①:(8.4)	外輪隆起ナゾ 内輪同心文で具輪	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
76	瓦器類	甕	SC06	AIE	①:(25.0) ②:(8.25)	底部外面平形ナゾ 底部内面同心文で具輪 他は凹形ナゾ	A:2cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内 面N7; 胎成 N6; 灰白色 N6; 灰白色→N2; 灰白色	
77	瓦器類	甕	SC06	AIE	①:(46.7) ②:(20.0) 胴部径(13.7)	底部外面平形ナゾ 底部内面同心文で具輪 他は凹形ナゾ 胎成中心部の位置が不明	A:3cm以下の白色・黒色砂粒 緑色を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N5; 灰白色 N6; 灰白色→N6; 白色	
78	土師器	甕	SC06	HEC	①:(7.6) 胴部径(6.0)	内面凹形ナゾ	A:2cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6 白色 胎成 N6	
79	土師器	甕	SC06	HEC	①:(14.0) ②:(11.4)	底部外面ナゾ 底部内面ナゾ	A:4cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
80	瓦器類	伴器	SC06	HEC	①:(16.2) ②:(8.1)	底部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
81	瓦器類	伴器	SC06	DEC	①:(13.0) ②:(4.1)	天井部内面凹形→フラズ 天井部内面凹形具輪 他は凹形ナゾ 胎成中心部の位置が不明	A:1cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N7; 灰白色	
82	瓦器類	伴器	SC06	HEC	①:(14.3) ②:(5.4)	天井部内面凹形→フラズ 天井部内面凹形具輪 他は凹形ナゾ 胎成中心部の位置が不明	A:2cm以下の白色砂粒を含む 胎土質 C:内面N6; 胎成 N6	
83	瓦器類	伴器	SC06	HEC	①:(14.2) ②:(3.7)	天井部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
84	瓦器類	伴器	SC06	HEC	①:(14.4) ②:(4.25)	天井部内面凹形→フラズ 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	
85	瓦器類	伴器	SC06	DEC	①:(11.4) ②:(4.9) 受部径(13.7)	底部外面凹形→フラズ 胎成内面凹形具輪 他は凹形ナゾ	A:3cm以下の白色砂粒 緑色を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	外輪面片立ち
86	瓦器類	伴器	SC06	DEC	①:(11.0) ②:(5.0) 受部径(14.4)	底部外面凹形→フラズ 胎成内面凹形具輪 他は凹形ナゾ 胎成中心部の位置が不明	A:3cm以下の白色・黒色砂粒を含む 胎土質 C:内面N7; 胎成 N6	

第3表 遺物観察表③

遺物番号	種類	素材	出土地点	位置(m-c) [1]遺物番号・[2]遺物所在番号・ [3]遺物種類(仮名称)・[4]形状	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:底面 C:口縁	備考
87	灰皿蓋	丹波	SC06 C1E	①12.0 ②3.0 変形厚14.7	底面外面中央へツボ。底面外面縁へフラツキ 底面内面へ底面 突出し筋ナシ	A:胎土下白色砂粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色	外面縁部 内面縁部縁部
88	灰皿蓋	丹波	SC06 A-D<sub>1</sub>-c&t	①13.0 ②7.5	底面外面縁へフラツキ。縁は回転ナシ 外面中央部へ底面突出し筋ナシ	A:胎土下白色砂粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色	内面縁部
89	土師器 高杯蓋	SC06 湯浅窪	①13.0 ②4.9 つまみ高さ2 つまみ高さ9	天弁外面縁へフラツキ。縁は回転ナシ 外面中央部へ底面突出し筋ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
90	灰皿蓋 高杯蓋	SC06 A1E	①13.0 ②14.4	天弁外面縁へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
91	灰皿蓋 高杯	SC06 C1E	②(8.0) 脚部厚(12.0)	内面縁部下方底面 脚部外面中央へ 脚部外面中央へ底面突出し筋ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
92	灰皿蓋 高杯	SC06	①13.0 ②14.0 脚部厚(11.7)	外底底面内面、脚部外面下方へ中央へ 外底底面内面中央へ底面 突出し筋ナシ	A:胎土下白色砂粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
93	灰皿蓋 蓋	SC06 中ノ下土土	②(13.0) ②(3.6)	底面外面中央へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
94	灰皿蓋 蓋	SC06 C1E	①(5.1) ②(3.4 変形厚)1 つまみ高さ2 つまみ高さ7	天弁外面縁へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
95	灰皿蓋 蓋	SC06 C1E	②(8.1) ②(12.0)	内面縁部下方 内面縁部ナシ 外面中央部へ底面突出し筋ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
96	灰皿蓋 土師器 脚部	SC06 湯浅窪	②(3.0) 脚部厚(17.1)	内面縁部ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
97	灰皿蓋 脚部	SC06 湯浅窪	①(33.4) ②(7.7)	外面縁へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
98	土師器 蓋	SC06	①(16.4) ②(4.3)	底面外面中央へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
99	土師器 蓋	SC06	①(21.0) ②(32.5) ③(28.7)	底面外面中央へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
100	土師器 蓋	SC06	①(19.0) ②(27.4) ③(28.0)	底面外面中央へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
101	土師器 不明品	SC06 D1E	径22.8 幅2.2 厚30.4				
102	土師器 不明品	SC06 D1E	径29.8 幅2.2 厚33.0				
103	土師器 丹波	SC07	①(12.0) ②(3.4)	天弁外面縁へフラツキ。縁は回転ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色、再白化部へツボ付 底面縁		
104	土師器 脚部	SK01	①(1.40) ②(0.6)	内面縁部ナシ			
105	土師器 特殊土製品	SK01	残存径2.5 最大幅2.95 幅2.0	ツバ成形			
106	黒色土師器 蓋	SK03	②(2.4)	内面縁部ナシ			残存者
107	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.3	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
108	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.2 ③(7.6)	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
109	土師器 小皿	SK04	①(10.0) ②1.2 ③(7.8)	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
110	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.2 ③(7.7)	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
111	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.2	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
112	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.4 ③(7.7)	底面外面へツボ。底面内面不定方向ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
113	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.2 ③(7.4)	底面外面へツボ。底面内面不定方向ナシ。縁は回転ナシ 底面外面下方底面 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
114	土師器 小皿	SK04	①10.4 ②1.3 ③(8.0)	底面外面へツボ。底面内面不定方向ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
115	土師器 小皿	SK04	①10.4 ②1.3 ③(8.0)	底面外面へツボ。底面内面不定方向ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
116	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.3 ③(7.2)	底面外面へツボ。底面内面不定方向ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
117	土師器 小皿	SK04	①10.0 ②1.2	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
118	土師器 小皿	SK04	①(10.0) ②1.3 ③(8.0)	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
119	土師器 小皿	SK04	①11.0 ②1.3	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
120	土師器 瓦片形	SK04	①(14.0) ②(3.8)	底面外面へツボ。内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ。底面外面縁部反折あり	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
121	土師器 瓦片形	SK04	①15.2 ②3.20	底面外面へツボ付ナシ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
122	土師器 瓦片形	SK04	①(15.2) ②(3.3)	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
123	土師器 瓦片形	SK04	①15.4 ②3.7	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
124	土師器 瓦片形	SK04	①(15.4) ②3.2	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
125	土師器 瓦片形	SK04	①(15.3) ②3.4	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
126	土師器 瓦片形	SK04	①(15.6) ②3.35	底面外面へツボ付ナシ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
127	土師器 瓦片形	SK01	①16.0 ②3.4	底面外面へツボ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		
128	土師器 瓦片形	SK04	①13.4 ②3.8	底面外面へツボ付ナシ。底面内面中央へ底面突出し筋ナシ 底面外面下方底面ナシ	A:胎土下白色砂粒、少量褐色粒を含む。B:底面 C:内面N15 灰白色		

### 第4表 遺物観察表④

遺物 番号	種類	素材	出土地点	位置(m <sup>2</sup> ) ①(正確な位置)②(高さ)③(保存台番号) ④(発掘区画)(西暦)	形態・技法・文様の特徴	A:土質 B:形状 C:色調	備考
129	土師器	丸底片	SK04	①13.8 ②(3.4)	底部外面へ7割の 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 内面コテで表す	A:黄褐色白色砂粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
130	土師器	丸底片	SK04	①13.8 ②(3.5)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:5cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内 面10YR8/2 灰白色	
131	土師器	丸底片	SK04	①13.8 ②(3.6)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:2cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
132	土師器	丸底片	SK04	①13.9 ②(3.4)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:5cm以下の白色-黒色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
133	土師器	丸底片	SK04	①13.6 ②(3.2)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:2cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	表小あり
134	土師器	丸底片	SK04	①(16.0) ②(3.5)	底部外面へ7割の 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:2cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
135	土師器	丸底片	SK04	①(16.1) ②(3.4)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:3cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
136	土師器	丸底片	SK04	①(16.0) ②(3.35)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:3cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
137	土師器	丸底片	SK04	①16.0 ②(3.7)	底部外面へ7割の 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色 → 13YR8/4 黄褐色	表小あり
138	土師器	丸底片	SK04	①(16.2) ②(3.2)	底部外面へ7割の 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム	A:4cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
139	土師器	丸底片	SK04	①(16.2) ②(3.5)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
140	土師器	丸底片	SK04	①(16.3) ②(3.4)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:2cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
141	土師器	丸底片	SK04	①(16.4) ②(3.5)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:4cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
142	土師器	丸	SK04	①(16.0) ②(4.8) ③(3.8)	内面1割をナデ 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 内面コテで表す	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:中々良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
143	黒色土師 A	丸底片	SK04	①(15.2) ②(3.5)	底部外面へ7割のナデ 底部内面ナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:5cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/1 黄 褐色 赤 10YR8/2 灰白色 → 7.5YR8/4 黄褐色	
144	黒色土師 A	丸底片	SK04	①(15.0) ②(3.2)	底部外面へ7割の 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム 内面コテで表す	A:5cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面10YR8/1 黄褐色 赤 2.5YR8/3 褐色 10YR8/3 赤 褐色	
145	黒色土師 A	丸	SK04	①(14.4) ②(6.2) ③(7.1)	底部外面へ7割の 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム	A:黄褐色白色砂粒を含む B:中々良好 C:内面10YR8/3 黄褐色 → 7.5YR8/1 黄褐色	表小あり
146	黒色土師 A	丸	SK04	①(15.0) ②(5.7) ③(7.1)	内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム	A:1cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:中々良好 C:内面10YR8/2 灰白色 赤褐色 赤 10YR8/3 黄褐色	
147	黒色土師 A	丸	SK04	①(16.0) ②(6.2) ③(6.4)	内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム	A:黄褐色白色砂粒を含む B:中々良好 C:内面10YR8/2 灰白色 赤褐色 赤褐色	
148	黒色土師 A	丸	SK04	①(16.0) ②(5.55) ③(7.4)	底部外面へ7割のナデ 内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 底部外面下位部オキム 内面コテで表す	A:1cm以下の白色砂粒, 黒粒を含む B:中々良好 C:内面2.5YR8/2 灰白色 → 7.5YR8/1 黄褐色	内面底位部あり
149	黒色土師 A	丸	SK04	①(16.0) ②(6.0) ③(6.5)	内面1割を 他は回転ナデ 底部外面下位部オキム 内面コテで表す	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:不良 C:内面10YR8/2 灰白色 → 10YR8/1 黄褐色 赤 10YR8/3 灰白色	
150	黒色土師 A	丸	SK04	①(14.2) ②(5.5) ③(6.5)	内面1割をナデ 底部外面下位部オキム	A:黄褐色白色砂粒を含む B:良好	
151	黒色土師 B	丸	SK04	①(15.6) ②(5.5) ③(5.3)	内面1割をナデ一部オキム 底部外面下位部オキム 底部外面底位部オキム	A:黄褐色白色砂粒, 3cm以下の黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色 赤褐色 赤 7.5YR8/2 明黄褐色 → 7.5YR8/1 黄褐色	
152	須恵器	片身	SK07	①11.9 ②(4.5) ③(4.3) ④(4.3)	底部外面回転へツラツラ 底部内面直で具柄 他は回転ナデ	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面N7 灰白色 → N5 灰白色	
153	須恵器	片身	SK07	①(13.7)	外面平行ナデ 内面同心文直で具柄	A:黄褐色白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:不良 C:内面7.5YR8/3 黄褐色	
154	須恵器	小壺	調査区画第 一層下7	①(5.6) ②(4.4)	内面回転ナデ	A:黄褐色白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:不良 C:内面7.5YR8/3 黄褐色	
155	須恵器	小壺	調査区画第 一層下7	残片長2.7 最大幅1.7 最大厚1.6	内面直ナデ	A:黄褐色白色-黒色砂粒を含む B:良好 C:内面N6 灰白色	
156	土師器	片身	SK04	①(13.7) ②(4.3) ③(4.3) ④(4.3)	外面平行ナデ 内面同心文直で具柄	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色 赤褐色 赤褐色	
157	土師器	片身	SK04	①(13.7) ②(4.3) ③(4.3) ④(4.3)	内面直ナデ	A:5cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色 赤褐色 赤褐色	
158	須恵器	片身	土土師ナ デ	①(2.5) ②(4.6)	天井部外面回転へツラツラ 天井部外面直で具柄 天井部内面直で具柄 他は回転ナデ	A:2cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内 面N6 灰白色 赤7.5YR8/1 黄褐色 赤N2 黄褐色	内面底位部あり
159	須恵器	片身	土土師ナ デ	①(3.0) ②(4.4)	天井部外面回転へツラツラ 天井部内面直で具柄 他は回転ナデ	A:1cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面N6 灰白色 → 7.5YR8/1 黄褐色	内面直位部あり
160	須恵器	片身	SC0調査区 画	①(1.75) ②(4.3) ③(4.3) ④(4.0)	外面外面回転へツラツラ 他は回転ナデ	A:黄褐色白色-黒色砂粒を含む B:良好 C:内面N6 灰白色	内面中位部 表小あり
161	須恵器	片身	土土師ナ デ	最大幅1.495 ②(4.2) ③(4.5)	内面直ナデ	A:3cm以下の白色-黒色砂粒を含む B:中々良好 C:内面N6 灰白色 赤7.5YR8/2 黄褐色	内面底位部 赤褐色あり
162	須恵器	片身	土土師ナ デ	①(5.6) ②(4.6) ③(4.6)	天井部内面直で具柄 他は回転ナデ 底部外面直で具柄	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内 面10YR8/2 灰白色 N4 赤褐色 N7 灰白色 N3 黄褐色	内面底位部
163	須恵器	片身	土土師ナ デ	①(3.0)	外面直ナデ一部直ナデ, 直状文をナデ 内面直ナデ 他は回転ナデ	A:黄褐色白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色	
164	須恵器	片身	土土師ナ デ	①(6.0)	外面直ナデ一部直ナデ, 直状文をナデ 内面直ナデ 他は回転ナデ	A:3cm以下の直りを含む B:良好 C:内面10YR8/1 黄褐色 N7 灰白色 N4 灰白色	内面直位部, 自然物
165	須恵器	片身	土土師ナ デ	①(13.0) ②(10.3)	外面直ナデ 内面直ナデ	A:黄褐色白色-黒色砂粒, 黒粒, 3cm以下の黒粒を含む B:良好 C:内面10YR8/2 灰白色 赤褐色 赤褐色 赤7.5YR8/3 黄褐色 → 7.5YR8/3 黄褐色	内面直位部, 自然物
166	須恵器	片身	野原12号 調査区画	①(13.4) ②(3.6)	天井部外面回転へツラツラ 天井部内面直で具柄 他は回転ナデ	A:3cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面N6 灰白色	内面直位部, 自然物
167	須恵器	片身	野原12号 調査区画 ゾーン	①(13.4) ②(3.7)	天井部外面回転へツラツラ 天井部内面直で具柄 他は回転ナデ	A:2cm以下の白色砂粒, 黒粒, 黒粒を含む B:良好 C:内面N6 灰白色	



## IV. 総括

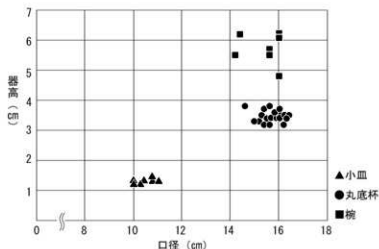
### 1. 遺跡の位置付け

#### (1) 各遺構の位置付け

**古墳時代** 当該期の遺構はSC01～07、SK07が該当する。須恵器蓋杯の時期から、牛頭編年ⅢA～ⅢB期にあたり、6世紀中頃から後半に位置付けられる。ⅢA期の蓋杯はSC04から出土しており、天井が高く丸みを帯びる杯蓋（第12図48）や立ち上がりが高く深みのある杯身（第12図51）などが該当するが、数量は少なく客体的である。主体をなすのはⅢB期の蓋杯である。当該期の蓋杯は、天井部あるいは底部が平坦なものである。これらは口縁部に段を有するものと丸くおさめるものがある。また、杯蓋には天井部と体部の境に廻る稜線あるいは沈線の有無が認められる。型式学的には有段・有稜のものが古式の様相とされているが、混在して出土している。ⅢB期の蓋杯は、SC01～07、SK07で確認された。これらを踏まえると、SC04はⅢA～ⅢB期（6世紀中頃～後半）、SC01～03・05・06およびSK07はⅢB期（6世紀後半）に位置付けられる。

また、遺構の切り合いからはSC07→SC01、SC04→SC06→SC05の先後関係を確認できる。特に調査区南側の竪穴建物で最初に造られたSC04はⅢA期の遺物を含むことから、遺物の位置付けと矛盾はない。またカマドの敷設位置からみると、当該地で最も古いSC04のみ西壁にカマドを設け、その他判明しているものについては、すべて北壁に設置していることから、カマド敷設位置には時期的変移が想定される。なお、ⅢB期の竪穴建物の廃絶以降平安時代まで遺構の展開は認められず、包含層からⅣA期の須恵器類が少量出土するのみである。

既往の調査状況からみると、上園遺跡2次調査地において5世紀後半の竪穴建物が1軒確認できるものの、竪穴建物が複数展開し、集落が拡大をみせるのは6世紀中頃から後半である。こうした集落は、上園遺跡の西側丘陵部に所在し、牛頭開窟期の窟として知られる本堂遺跡14次の窯跡や野添6号窯跡の操業に関わるものと考えられている。後述するように、今回確



第25図 SK04出土供膳具法量分布図

認した集落も須恵器生産に関わる可能性が高く、須恵器生産の開始と集落の拡大が密接に関連することを本調査でも追認できたと言える。

**平安時代** 当該期の遺構は、SK01・03・04があるほか、遺物が小片のために報告を見送ったSK02・05やピットの多くも当該期の遺構とみられる。特筆すべきはSK04出土土器群である。本遺構からは土師器・黒色

土器の供膳具が折り重なって出土し、一括廃棄が想定される。器種は小皿・丸底杯・椀からなり、第25図の法量分布図が示すとおり、小皿と丸底杯の法量はまとまりをみせる。法量の平均値をみると、小皿は口径10.4cm、器高1.3cm、丸底杯は口径15.7cm、器高3.5cmを測り、小皿・丸底杯ともにすべて底部へら切りである。山本信夫氏による編年に照らすと、XI期（11世紀中頃）に相当する。椀類は、中島恒次郎氏の分類に従うと、黒色土器A・B類ともに椀Ⅲ－4類に対応する。これらは、山本編年XI期に相当し、小皿や丸底杯との時期的矛盾は認められない。

以上のことから、SX04の遺物は当該期の良好な一括資料と位置付けられる。なお、上園遺跡では11世紀後半から12世紀にかけて集落が拡大する。当該期には焼き歪んだ瓦器や窯道具とみられる土製品が出土することから、土器作りの村として発展したとみられるが、今回の調査地内では、土器生産関連の遺構や遺物はほとんど認められなかった。

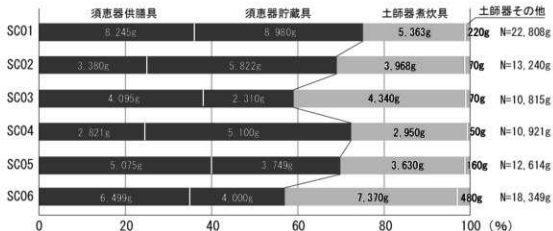
## （2）須恵器工人集落に関する基礎的検討

上園遺跡は、既往の調査成果から牛頸窯跡群開窯期の工人集落と考えられている。太田智氏は牛頸窯跡群の須恵器工人集落を類型化の中で、工人集落を認定する諸要素を以下のとおり提示した（太田2015）。①ロクロビット、②粘土の存在、③切削物、④生産道具（叩き板・当て具など）、⑤失敗品、⑥須恵器の量（支群全体で8割）。こうした要素をより多く認めることができる集落については、須恵器工人集落として位置付けが可能であるとした。

ここでは上記の要素に着目しながら、本調査地点が工人集落として位置付け可能か否かを明らかにしたい。今回の調査では、①・②・④は確認できていないため、③・⑤・⑥の要素について検討する。

**切削物** 切削物とは、甕などの成形時に不要な部分を削り取ったものである。窯道具やテストピースとしての役割が指摘されており、須恵器生産との関わりを示す遺物である。SC01から2点出土しており、いずれも須恵質を呈している（第6図25・26）。

**失敗品** 失敗品については客観的数値を示すことができなかったが、焼成時の割れや焼き歪み、



第26図 竪穴建物出土土器比率図

軸着が認められる資料も一定量存在する。

**須恵器の量** 基礎的なデータの収集に努めるため、各竪穴建物で出土した須恵器と土師器の量比を検討した。竪穴建物から出土したすべての土器を対象とし、図示していないものも含む。器種は細かく分類せず、須恵器は供膳具（蓋杯・高杯など）と貯蔵具（壺・甕など）、土師器は煮炊具（甕・甗）とその他（杯・壺など）に大別した。また、破片が多く時期の細分は困難なことから、時期を踏まえた分類は行っていない。計測方法については重量計測を選択した。

結果は第26図に示すとおりである。全体を検出したSC01・02は、須恵器7割・土師器3割と須恵器が優勢を占める。部分的な検出に留まった他の建物についても、須恵器は6～7割を示している。太田氏が示した8割には満たないものの、須恵器が優位であることが分かる。また、一個体の重量が重い貯蔵具が主体を占めるものと想定されたが、実態としては杯類が高い割合を示す場合が多い。当該期の杯蓋・杯身が一個体あたり250～300gである点から勘案すると、個体数としては供膳具が卓越しているとみてよいだろう。一方、土師器は煮炊具が圧倒的に優勢を示し、用途による土師器・須恵器の明確な使い分けがなされていたことが分かる。

なお、大野城市において須恵器と土師器の量比に関する分析はなく、比較すべきデータがない。従って、この数値が須恵器工人集落特有のものであるか、直ちに判断は下しかねる。今後同様の検討を進め、基礎的なデータの収集に努める必要があるだろう。

**小結** 以上のとおり、太田氏が指摘した③・⑤・⑥の項目が認められ、須恵器工人集落としての要素を備えている点は首肯できよう。ただし、粘土やロクロピットといった須恵器生産を直接的に示す痕跡は確認できないことから、製陶を行うような場所ではなく、工人の居住域と製品の二次的な選別や集積を兼ねる場所であった可能性が高い。割れや焼き歪みといった失敗品を含むほか、通常の集落ではあまり出土しない壺や器台といった特殊品も存在する点は、上記の想定を支持する痕跡と評価できる。

## 2. 平行文当て具痕を有する須恵器杯類について

SC06から出土した須恵器杯身（第17図86）は、内面に平行文当て具の痕跡が残る。6世紀後半の蓋杯の内面には、同心円文の当て具痕が残るのが一般的であり、平行文当て具痕は極めて客体的な存在と言える。内面に平行文当て具痕を有する須恵器は、寺井誠氏により6世紀後半から7世紀にかけて北部九州一帯に分布することが明らかにされている（寺井2008など）。器種は甕が最も多く、その他に甗や壺もあり、蓋杯や高杯は少数のようである。

**福岡平野における出土例** 平行文当て具痕を有する杯類について、福岡平野における出土例を確認すると、管見の限り10遺跡22点が知られる（第5表）。生産窯は雉子ヶ尾窯跡と野添12号窯跡の2か所で、いずれも大野城市に所在する。雉子ヶ尾窯跡は大野城市東部の乙金地区に位置し、昭和48年の調査においてⅢB期の窯跡が3基礎確認された。平行文当て具痕を有する蓋杯は1・2号窯で出土しており、1号窯跡では内面に平行文当て具痕を有する把手付の平底甕も確認されている。これらは近年認識されたもので、未報告資料として紹介された（上田編2016）。出土資料の全容は把握できていないが、同心円文当て具が主体を占めつつ、平行文も

第5表 平行文当て具痕を有する須恵器杯類一覧

No	遺跡名	遺跡	所在地	時期	杯蓋	杯身	高杯	備考	出典
1	三所・赤原遺跡群第40次・53次	5・25・D16層	福岡市西区大洲	ⅢB		1			福岡市1173号
2	重留村下遺跡第1次	SC08	福岡市早良区重留1丁目	ⅢB		2			福岡市101号
3	中村町遺跡第1次	SC07	福岡市南区野間1丁目	ⅢB		1			福岡市373号
4	雫子ヶ尾窯跡	1号窯	大野城市大城1丁目	ⅢB	1	1		内面平行文当て具の胎子付平底蓋あり	
5		2号窯	大野城市大城1丁目	ⅢB	1	1			大野城市136号
6	雫子ヶ尾古墳		大野城市大城1丁目	ⅢB	1	1		雫子ヶ尾窯跡からの産出のみ	
7	瀬田の森遺跡第7次	SC04	大野城市乙・9丁目	ⅢB	2				大野城市120号
8	瀬田の森遺跡第17次	SC01	大野城市乙・9丁目	ⅢB			1	高杯蓋	大野城市106号
9		SC02	大野城市乙・9丁目	ⅢB	1				
10	上園遺跡第17次	SC06	大野城市上大路1丁目	ⅢB		1			本報告書
11	中瀬野遺跡群	12号窯跡	大野城市上大路1丁目	ⅢB	2				本報告書
12		SR114		ⅢB		1			
13	九州大学筑紫キャンパス遺跡群 (新井田遺跡)	SR226	春日市春日5丁目1丁目	ⅢB		1	有蓋杯身		九州大学理工学課認定 (筑紫地区遺跡群 第10号)
14		SV402窯跡		ⅢB		1			
15		SR225		ⅣA	1				九州大学理工学課認定 大野城市101号
16	大野市史跡109-2次	土野野地塚	大野城市観音寺中1丁目	Ⅶ		1		1線部を欠す。時期不明	

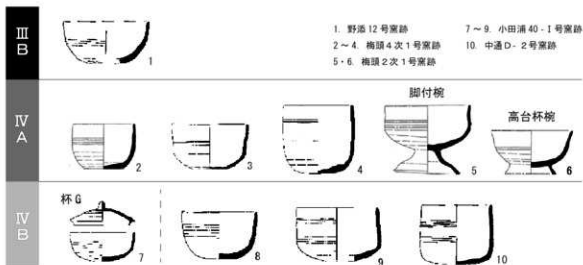
一定量存在するようである。周辺の集落に目を向けると、窯から北へ約600mの大野城市葉師の森遺跡から出土しており、雫子ヶ尾窯跡からの供給が想定される。

一方牛頸窯跡群では、平行文当て具痕を有する蓋杯は確認されていなかったが、近年上田龍児氏が存在に言及している（上田2021）。今回、野添12号窯跡において杯蓋を2点確認した。詳細については、V章を参照されたい。出土資料全点を点検してはいないものの、同心円文当て具が圧倒的に多く、平行文はかなり客体的とみられる。時期はⅢB期に位置付けられる。今回報告した上園遺跡17次調査地から南へ約700mの位置にあり、需給関係が想定される。また、牛頸窯跡群域に含まれる九州大学筑紫キャンパス遺跡群からもⅢB～ⅣA期の蓋杯や高杯が出土しており、窯跡との関連が示唆される。その他、福岡市南区の中村町遺跡や福岡市早良区の重留村下遺跡では、ⅢB期の所産とみられる杯身が出土している。どちらも周囲に生産地は確認されていない。

**時期と分布の傾向** 出土事例をみると、平行文当て具痕を有する蓋杯の時期は、概ねⅢB期（6世紀後半）に収まるようである。当該期を境に同心円文当て具痕も減少することから、平行文当て具痕も同様の変遷をたどるのだろう。分布傾向をみると、生産地と消費地が近接するパターン（乙金地区・牛頸窯跡群周辺）と生産地不在のパターン（福岡市中村町遺跡・重留村下遺跡など）がある。前者は従来から新羅・加耶系渡来人の存在が指摘されている地域であり、土器作りへの関与も想定されている（上田2021）。前者のうち、乙金地区では平行文当て具痕を残す軟質系土器（須恵器的技法で製作された土師器）が多く出土することからも、こうした想定を指示する。後者については、大野城市域からの搬入の可能性もあるが、福岡市元岡・桑原遺跡群をはじめ福岡市西部地域においても平行文当て具痕を有する須恵器（主に甕）や軟質系土器が集中することから、この地域との関わりも視野に入れるべきであろう。

### 3. 須恵器碗について

SC01およびSC06からは、体部下半が丸みを帯び、外面中位に2条の沈線が廻る須恵器が出土した（第5図11・12、第17図88）。これらは一般的に「碗」と呼ばれるもので、供膳具の一種として認識されており、牛頸窯跡群においても普遍的に出土する器種である。寺井誠氏は、



第27図 牛頸窯跡群における須恵器碗の変遷 (1/6)

牛頸窯跡群出土の高台付碗を検討し、金属器を模倣した陶質土器に倣って製作されたものであると指摘した(寺井2012)。このほかに牛頸窯跡群における碗に関する専論はなく、特に高台の付かないオーソドックスなものは変遷等不明確な部分が多い。そこで本稿では、牛頸窯跡群における須恵器碗の時期的変遷に主眼を置き、検討を行う。

**III B期** 牛頸窯跡群はIII A期から操業を開始するが、碗の生産が認められるのはIII B期からである。窯に伴う資料としては野添12号窯跡例が最も古い(第27図1)。底部付近は回転ヘラケズリされ、丸みを帯びる。体部は内湾気味にのび、中位には2条の沈線が廻る。同時期に位置付けられる本調査出土例と形態的に類似する。

**IV A期** 当該期は窯の数が増加し、生産の拡大期にあたる。いずれの窯においても、碗の生産は普遍的に認められるが、生産量全体に占める割合は低い。形態・法量ともバリエーションに富むが、最も多いものは、底部付近が回転ヘラケズリされて丸みを帯び、体部は直線的あるいは内湾気味にのびるものである。外面には沈線が廻るものに加え、カキメを施すものもある。内面に降灰が認められるものが多いことや、セットになりそうな蓋が存在しないことから、基本的には無蓋器種とみられる。また、口径に対して器高が異様に高い一群があり(第27図4)、これらは前述のものとは異なる型式(系譜)に位置付けられる可能性が考えられる。加えて、碗から派生したとみられる脚付き碗や高台付碗の生産が始まるのもこの時期である。

**IV B期** 前代に引き続き、碗は普遍的に生産されている。形態・技法ともに前代との明確な差異は見出しがたい。当該期には、かえりを有する蓋とセットになる杯Gが普遍的に出土するようになる。これらは体部下半が丸みを帯び、外面中位には沈線が廻ることから、碗との形態的類似性は高いものの、有蓋器種という点で異なる。杯Gの蓋・身がセットで出土した小田浦窯跡群40-1号窯の資料をみると、杯Gは口径10cm台にまとまるのに対し、碗は口径12cmと大振りでは蓋は伴わないことから、杯Gと碗は明確に作り分けられていたとみられる。

**V期** 当該期は窯が減少する時期にあたり、現状では窯跡に伴う事例を見出せない。続くVI期の窯跡資料には碗が存在しないことから、この時期までには消失したものと考えられる。

小結 牛頸窯跡群における須恵器碗の変遷について概観した結果、ⅢB～ⅣB期（6世紀後半～7世紀中頃）に生産された器種であることが明らかになった。杯Hを主体とする古墳時代的土器様相下において出現・盛行し、高台を有する杯Bや平底の杯Aといった律令的土器様相となる7世紀後葉には完全に払拭される点は興味深い。また、碗は銅鏡といった金属器との関連が指摘されているが、今回は触れることができなかった。金属器だけでなく、朝鮮半島の陶質土器との関連も指摘されることから（藤川1993、寺井2012など）、両者を視野に入れつつ、検討を深めていきたい。

#### 参考文献

- 上田龍児編 2016『乙金地区遺跡群14』大野城市文化財調査報告書第136集 大野城市教育委員会  
 上田龍児 2021「牛頸窯跡群の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』第87集 九州古文化研究会  
 太田 智 2015「須恵器工人集落の研究 序」『古文化談叢』第74集 九州古文化研究会  
 寺井 誠 2008「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』第83号 九州考古学会  
 寺井 誠 2012「6・7世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会  
 寺井 誠 2019『渡来文化の故地についての基礎的研究—新羅伽耶を中心として—』大阪歴史博物館  
 中島恒次郎 1992「大宰府における碗形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会  
 藤川智之 1993「古墳時代須恵器碗・台付碗の検討」『真朱』第2号 徳島県埋蔵文化財センター  
 山本信夫 1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会

## V. 附編

### 1. 野添12号窯跡出土資料の紹介

野添12号窯跡は、昭和161（1986）年に大野城市教育委員会が発掘調査を実施し、翌年に報告書を刊行した。ここでは、未報告であった平行文当て具痕を有する須恵器について報告する。須恵器（166・167）166・167は杯H蓋である。いずれも復元口径13.4cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、口縁部は丸くおさめる。内面には平行文当て具痕が残るが、ほとんどが回転ナデ調整によりナデ消されている。いずれもⅢB期に位置付けられる。



第28図 野添12号窯跡出土遺物実測図（1/3）

# 圖 版







(1) 調査区全景 (北東から)



(2) 調査区俯瞰 (上が北)

図版2



(1) SC01全景 (東から)



(2) SC01南北土層 (西から)



(4) SC01カマド土層 (西から)



(3) SC01貼床南北土層 (西から)



(5) SC01カマド完屈状況 (南東から)



(1) SC02全景(東から)



(2) SC02東西土層(南東から)



(4) SC02カマド土層②(南東から)



(3) SC02カマド土層①(南西から)



(5) SC02カマド完屈状況(東から)

## 図版4



(1) SC02貼床除去状況 (東から)



(5) SC04南北土層 (西から)



(2) SC03全景 (東から)



(6) SC04カマド土層 (東から)



(3) SC03東西土層 (南から)



(7) SC05全景 (南東から)



(4) SC04全景 (南東から)



(8) SC05土層 (南東から)



(1) SC06全景 (南西から)



(2) SC06東西土層 (南西から)



(4) SC06カマド土層② (南西から)



(3) SC06カマド土層① (南東から)



(5) SC06カマド遺物出土状況① (東から)

## 図版6



(1) SC06カマド遺物出土状況② (東から)



(5) SK04完掘状況 (南西から)



(2) SC06貼床除去状況 (南西から)



(6) SK04遺物出土状況 (南西から)



(3) SC07全景 (東から)



(7) SK04調査状況 (南東から)



(4) SK01全景 (北西から)



(8) 調査前全景 (北西から)



出土遺物①

图版 8



30



64



34



67



69



51



74



55



86





84



91



87



94

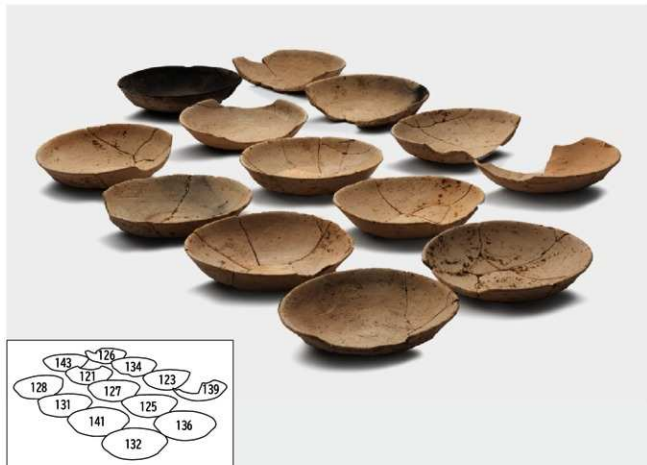


88



152





## 報告書抄録

ふりがな	かみのそのいせき							
書名	上園遺跡11							
副書名	第17次調査							
巻次	11							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第205集							
編著者名	山元 瞭平							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2023年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
上園遺跡	福岡県大野城市 上大利4丁目118番 1	402192		33° 30′ 57″	130° 28′ 57″	2022年 1月21日 ～ 2022年 3月30日	160㎡	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上園遺跡 第17次調査	集落等	古墳・ 平安	竪穴建物・ 土坑・ピット	須恵器・土師器・ 鉄製品・石製品				
要約	調査の結果、古墳時代後期の竪穴建物跡を確認した。須恵器が大量に出土し、焼き歪みや軸着資料が多く含まれることから、付近の窯で生産された須恵器の選別が行われた可能性が考えられる。その他、平安時代後期の土坑を確認し、土師器・黒色土器の良好な一括資料が得られた。							



大野城市文化財調査報告書 第205集

上園遺跡11

令和5年3月31日

発行 大野城市  
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社  
〒848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

上  
園  
遺  
跡  
11

大野城市文化財調査報告書  
第206集

大  
野  
城  
市

